

論 説

ニューヨーク・タイムズが伝えてきた倉敷

—— 都市の「他画像」に関する若干の考察

谷 聖 美

はじめに

第1章 日本の地方都市と海外からのまなざし

1-1 倉敷、金沢のまちづくりと都市の個性

1-2 海外の目に映らない日本の地方都市

1-3 ニューヨーク・タイムズの重要性

1-4 ニューヨーク・タイムズの倉敷関連記事概観

第2章 ニューヨーク・タイムズの記事にみる倉敷

2-1 倉敷関連記事の分類

2-2 経済面の倉敷関連記事

2-3 社会、政治面の倉敷関連記事

2-4 文化、観光、地域社会面の倉敷関連記事：戦後の15年間

2-5 文化、観光、地域社会面の倉敷関連記事：1960年代と70年代

2-6 文化、観光、地域社会面の倉敷関連記事：1980年代と90年代

2-7 文化、観光、地域社会面の倉敷関連記事：2000年以降

おわりに

はじめに

いうまでもなく、人間は動物の一種である。人間の DNA とチンパンジーの DNA は、約30億の塩基配列においてわずか1パーセントの違いしかもっていない。しかし、他方で人間と他の動物の間には断絶と断絶といいいほどの違いもある。言語しかり、複雑な道具の製作と使用しかり、目的意識的な協力体制の構築能力しかり。乳児の鏡像認知に関する今日では周知の実験を待

つまでもなく、個体が自分自身を対自的に捉える自己認知力も、人間と他の動物全体とを分かつメルクマールの1つである。いや、原初的な形ではあれ、道具の使用同様、鏡像認知力についても高等動物の一部にこれを認めることはできるかも知れない。それでも、その自己認知力をもとにして自己について語る能力となると、これはもう人間だけが持つ能力である。そして、自分についてのこの「語り」を膨らませながら、人間は、そして人間だけが、なにがしかの自己認識、さらにはアイデンティティを紡ぎ出していく。チンパンジーが自分の物語を持つことはない。

人間が自分自身に関して創り出す物語、あるいは(多少意味内容が違うが)アイデンティティは、しかし、現実の鏡を見て、あるいは自分の頭の中にある認識の鏡を見ながら、いわば独り相撲のような形で形成されるとは限らない。純粹の自己凝視ということも考えられないではないが、多くの場合、自己認識はむしろ他者と接するなかで、他者との対比を通じて、さらには他者が自分に関して発するメッセージの影響を受けながら形成されると言ってもよいだろう。そのメッセージも、必ずしも言語化されているとは限らない。たとえば、まなざしの権力性ということがよく言われる。フーコーのパノプティコンはそのようなまなざし＝権力という言説の最たるものである。もちろん、パノプティコンという言説装置は、「権力」の夢と「反権力」の夢が共犯関係のなかで創り出した1つの比喻に過ぎない。それでもなお、他者が自分に対して発する非言語的メッセージが、それぞれの「自分物語」やアイデンティティを織り上げ、あるいは織り上げられた布地を切り裂く重要な素材たり得る、という事実には変わりはない⁽¹⁾。

(1) まなざし(またはそれについて自分が持つイメージ)がアイデンティティの形成とそのゆらぎにいかにか大きな意味を持つかについて、戦後日本の精神史のなかで深く掘り下げた批評家が江藤淳である。同、『成熟と喪失“母”の崩壊』(講談社, 1967年)。次も参照。先崎彰容『ナショナリズムの復権』(筑摩書房, 2013年)172-176頁。他方で、バウマンは、「アイデンティフィケーションは階層化の強力な要因でもあり、そのもっとも区分的で明らかに弁別的な側面の1つでも」あると述べて、他者から一方的に貼り付けられる「承認のスタンプ」としてのアイデンティティというその暗い側面を指摘している。Zygmunt Bauman and Benedetto Vecchi, *Identity*, 1st edition, Polity Press, 2004, 伊藤茂訳『アイデンティティ』(日本経済評論社, 2008年), 68-72頁。

いずれにせよ、言語的なメッセージとともに、他者のまなざし、あるいはより常識的にいうと他者が自分に対してとる態度が、人々の自己認識やそれにもとづく振る舞いを規定していくということが重要である。社会学でいう役割期待も、このような文脈で理解するなら、人間の内面形成プロセスを説明する理論的な分析装置として考えることができる。

自分に関する物語、あるいはアイデンティティはしかし、個々人の内面で生成変容するだけではない。人間が他の動物と区別されるいまひとつの特性は、そうしたアイデンティティが個体レベルだけではなく集合（集団、組織や共同体を含む）レベルでも形成され、そのことを通じて集合体を構成するメンバーの意識や行動を規定する点にも求められる。集合体の態様はもとより多様である。家族、地域、会社のような組織、ピア・グループ、あるいは「くに」等々。そして、個人の自己認識が何らかの自己愛（場合によっては自己嫌悪）と結びつくように、集合的な自己認識、あるいは集団アイデンティティも、その集団に対する感情的なコミットメントを生み出しやすい。家族の物語、イエや家柄意識、トヨタ一家、（今は亡き）拓銀マン、郷土愛、ニュー Yorker や東京人、みやこびと（京都人）、上海人、〇〇県人、ふるさとやホームタウン意識、民族意識、国民意識、祖国、ナショナリズム、等々。ライオンやチータの影におびえながら集団で移動を続ける大型草食獣たちは、なるほど自分たちの群れとそれ以外を明らかに区別している。しかし、捕食者や別の群れが自分たちに対して発する何らかの情報を織り込みつつ、自分たちの群れに共通のイメージないし物語を編み出すことなどありえない。それができる（あるいはしてしまう）のは人間だけなのだ。

都市は、その生成、持続、あるいは発展の過程で、自らに関する何らかの認識ないしイメージ（自画像）をいただくようになる。そして、たとえ漠たるものに過ぎないとしても、この自己イメージを多少なりとも自覚的に掘り下げることによって、都市は自らに関する物語（ナラティブ）を紡ぎ、それをみずからのアイデンティティの核にしていく。それは、都市という地域社会に共有された集合的なアイデンティティだといってよいだろう⁽²⁾。

こうして、たとえば都市の場合、古都というアイデンティティはその内側においてのみ、あるいは内部的な要因だけによって創られるとは限らない。鎌倉や京都、サントベテルブルクといった街に外から与えられる規定性も、それら都市（都市住民）の自己イメージを強烈に拘束する。同時にまた、都市の内部では、外から与えられるイメージやブランド、レッテル、あるいはその都市に関する外部世界での「語り」が、逆にオリジナルブランドであるかのように錯覚されていくのである。日本の各地にある「小京都」といわれる小都市についても、同様の作用を認めることができるだろう。あるいは、よりプラグマティックなレベルでは、東京を世界都市として位置づけ、これをグローバルな競争市場での戦略的城塞として拡大強化しようという政策にその好例をみることができる。東京のそのような規定性は、東京（都民）のプライドや自己イメージだけを素材として組み立てられているのではなく、欧米のアカデミズムにおける言説がジャーナリズムをも巻き込んで東京にその様な規定性を与えたという、外生的な文脈にも淵源するのである⁽³⁾。

本稿の目的は、以上のような問題意識を背景として、ニューヨーク・タイムズ（The New York Times）が岡山県の倉敷市をどのように捉え、そして伝えてきたのかについて、多少なりとも分析的に論じることである。その際、同紙電子版の検索機能⁽⁴⁾、国会図書館が所蔵している同紙のマイクロフィルムを利用するとともに、同紙の国際版であるインターナショナル・ヘラルド・トリビューン紙（International Herald Tribune）も参照する。そして、

(2) 都市を含む地域のアイデンティティに関しては、次の論文の考察が簡潔に考察している。Bui Thu Hang『アイデンティティに着目した中山間地域におけるおつきあい行動分析』（2011）、京都大学大学院工学研究科提出修士論文（都市社会学専攻）、3-7頁。

(3) サスキア・サッセンがニューヨークやロンドンと並んで東京を「グローバル・シティ」と位置づけたことは、その批判的分析の意図を超えて東京および日本政府を中心とする政策コミュニティに大きな影響を与え、東京の新しい物語創出という衝動を生み出したように思われる。Saskia Sassen, *The Global City: New York, London, Tokyo*, Princeton University Press, 1991、伊豫谷登士翁訳『グローバル・シティ：ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を』（筑摩書房、2008年）。

(4) 同紙電子版を通じて、1885年以降のすべての記事をキーワードで検索することができる。ただし、一部の記事本文は追加料金を支払わないとこれを読むことができない。

その作業を通じて、メディアに映った倉敷という町のイメージとその変遷を跡づけていく。

ただ、結論の一部を先取りして述べるなら、倉敷市とその市民のほとんどは、ニューヨーク・タイムズという有力紙が自らについて報じる記事に注意を払ってはこなかった。同紙の記者が実際に町を訪れ、時には隔々にまで目を配って取材をしても、それがいかなる記事になって報じられたのかについては市の当局者も一般市民も全く無頓着で、地元では取材を受けたという事実さえすぐに忘れ去られていったのである。したがって、ニューヨーク・タイムズの記事が倉敷のアイデンティティ形成に外から直接作用したということはない。ただ、昨年来、筆者がまちづくりの会合などでニューヨーク・タイムズによる報道の履歴を紹介したところ、ようやく若干興味を示す人々が現れるようになった。何よりも、同紙による倉敷についての詳しい報道が外国人観光客の増加につながったことは確かであり⁽⁵⁾、彼らの語りやまなざしを通じて同紙が間接的に倉敷のイメージにながしかの痕跡を残したことも同様に確かである。観光政策という点だけからも、倉敷市はそうした海外の目に敏感になっており、同市の自己イメージ、都市アイデンティティの生成変容を見ていく上で、ニューヨーク・タイムズの報道内容を検討することには一定の意味があるのではないかと考える次第である。

なお、以後本稿でニューヨーク・タイムズの記事を引用する際には、記事の見出しと日付だけを注に付し、新聞紙名はいちいち表記しない。ただし、ニューヨーク・タイムズ以外の新聞から何かを引用する場合には、この限りではない。

(5) 1990年から91年にかけて、筆者がフルブライト・リサーチャーとしてアメリカに滞在した際、主として大学や学会関係者のなかに、1985年にニューヨーク・タイムズが倉敷について特集を組んだことを覚えている人が何人もいて驚いたことがある。その中には、その記事で初めて倉敷について知り、実際に日本滞在中この町を訪れたという人も2、3人いた。

第1章 日本の地方都市と海外からのまなざし

1-1 倉敷、金沢のまちづくりと都市の個性

倉敷は、江戸時代からの町並みが美しく保存された美観地区や、かつての紡績工場をエレガントなホテルとしてよみがえらせたアイビースクエアなど、美しい伝統美で全国にその名が知られている。しかし、この町は、単に古いものが残っているというだけではなく、都市景観の保全とその現代的再生に多大の時間とエネルギーを注いできた町でもある。実際、自治体としての倉敷市は早くも1968年に「倉敷市伝統美観保存条例」を独自条例として制定し、78年にはそれを「伝統的建造物群保存地区保存条例」に発展させ、条例による私権の制限という困難な課題に取り組みながら、町並みの保全と改善を通じてその都市アイデンティティを磨いてきたのである。そうした倉敷市の取り組みは、古都保存法という特別の立法措置を生み出した京都や鎌倉を別とすれば、金沢市とともにこの分野のさきがけをなすものであり、それは国の政府が展開する施策の遙か先を行くものであった。国レベルでは、2004年になってようやく景観法という法律が成立したが、それは倉敷や金沢といった地方都市による実践と、その実践を通じて鍛えられた理論やビジョンを後追いするものでしかなかったのである⁽⁶⁾。

倉敷や金沢は、都市景観保全という特定分野においてだけ秀でていたのではない。2つの都市は、景観保全政策によって古い町並みを救っただけでなく、町並みにあった道路舗装や河川敷の整備など多様な事業を展開して都市空間全体に磨きをかけ、さらにそのようにして創造的に再生される町並みを核とする個性豊かな物語を紡いでいった。すなわち、これらの都市が育ててきたのは、単に古いものを残すというだけにとどまらず、まさに現代における創造的な都市アイデンティティそのものだったのである。そして、両市の

(6) 倉敷市の取り組みについては次を参照。室山貴義、金井利之『倉敷の町並み保全と助役・室山貴義』（公人社、2008年）。金沢市の取り組みについては、次が詳しい。伊藤修一郎『自治体発の政策革新：景観条例から景観法へ』（木鐸社、2006年）。

取り組み、またそれによって蓄積された政策知は多くの町に伝搬し、それぞれの地域における自然と歴史を踏まえた独自の都市空間や地域的、政治的な文化、総じてアイデンティティを生み出していったのである。こうして、日本の各地には、魅力あふれる多くの町が個性を競い、外の世界にもその魅力を発信することになる。

もちろん、京都や東京といった大都市もそうした都市アイデンティティの形成と発信にとりわけ大きな成果を上げてきたことは否定できない。本稿の主張は、そうした大都市のみならず、日本の中小都市にもみるべき実例がたくさんあり、なかでも倉敷や金沢は特に誇るべき成果を上げているということである。

2012年、台湾・高雄市および国立高雄大学法学院の代表団が岡山県庁と岡山大学法学部を訪問した際、筆者は彼らに是非倉敷のまちづくりについて学んで行くように勧めたことがある。彼らはまず倉敷市でその景観行政についてレクチャーを受け、夕方筆者の案内で倉敷の美観地区とその周辺を視察した。一行は市役所の講義でも町中でも熱心にメモをとり、観光客が気にもとめないマンホールの蓋（地味だが美しい文様が施されている）やひっそりとたたずむ道標まで写真に納めて講義で学んだことと照らし合わせていた。その一行の一人は台湾のEU代表部の副代表を長く勤め、ブリュッセルで約40年を暮らした人であった。筆者は翌日岡山でその人にインタビューをして感想を聞いたのであるが、彼女は、「倉敷のように創造的 creative な町並み保全に成功しているまちは、ヨーロッパでもほんの一握りしかない、すばらしいの一言に尽きる」と、感に堪えたように褒め称えていた。それはあながち筆者に対するお世辞からのみ出た言葉だったとは思われない⁽⁷⁾。

1-2 海外の目に映らない日本の地方都市

超高齢社会やシャッター通りなど、地域をめぐる話題には暗いものも少な

(7) インタビューは2012年7月23日。

くない。コンパクト・シティという新しいコンセプトも、それは、よんどころない対応という後ろ向きの姿勢とセットになっていると解釈することもできる。それでも、上に述べたように、少なくとも現時点においては、日本には個性と魅力に満ちた多くの都市があることは積極的に評価してよいであろう。かつてはスプロールというネガティブ・イメージが先行せざるを得なかった大都市郊外にも、たとえば宮崎駿の名作アニメ「耳をすませば」の舞台となった聖跡桜ヶ丘駅⁸⁾周辺のように、時を経て現代の生活情緒にあふれる落ち着いた都市景観を創り出しているところも少なくない。少しでもだけた表現をするなら、日本の町には見所、訪れ所がたくさんあるのだ。そのような認識は、確かに国内ではある程度広まっているように見える。しかし、一旦国外に目を移すと、ほとんどの人が東京など一部の大都市以外は日本にある多様な個性について全く知らないという現実には愕然とすることになる。そのことを端的に示す事例を1つ、次に挙げてみよう。

2006年7月、世界各国の政治学者が集う世界政治学会 (International Political Science Association, IPSA) 第20回世界大会 (World Congress) が福岡市で開催された。IPSA は、世界各国の政治学会と政治学者でつくる国際的な学術団体で、2012年サンチアゴ (チリ) 大会までは3年ごと、その後は2年ごとに各大陸を巡回しながら大会を開いている。政治学者のほかにも、国によっては高位の外交官なども大会には参加している。福岡大会には、学会史上最多となる1,925人⁹⁾が参加し、家族連れでやってきた人も少なく

(8) 京王電鉄京王線、東京都多摩市。

(9) 世界政治学会のホームページより。http://www.ipsa.org/node/15 (2013年5月18日アクセス)

この数字は、あくまでも世界政治学会に加入している(つまり、会費を納めている)政治学者で、かつ福岡大会に出席した者の数だけを示している。しかし、大会会場では、この年だけ同じ期間に平行開催という形をとった日本政治学会の年次研究会も開かれており、後者への参加者であれば、非会員でも前者への無料参加が認められていた。世界政治学会の方は、分科会からレセプションまですべて英語によって運営されたが、それでも世界政治学会に未加入のままその分科会などに参加した人の数はかなり多かったはずである。

世界政治学会世界大会の参加者数は、次のサンチアゴ大会 (2009年) でさらに5名増えている。2012年マドリッド大会 (スペイン) の参加者数はホームページへのアクセス時点ではまだ表示されていない。

かった。大会は大成功のうちに終わり、会長をはじめ、海外からの参加者はこぞって大会を主催した日本政治学会の驚異的なコンベンション運営能力を褒め称えた。また、彼らの多くが、史上希に見る熱波をものともせず、分科会の合間やその日の行事終了後に博多のまちを楽しんだ。なかでも、大会期間前半と重なった博多祇園山笠の行事や近郊にある太宰府天満宮は彼らを驚嘆させ、大会に協力した地元自治体やまちで彼らをもてなした福岡市民のホスピタリティも賞賛された。

本稿が主として焦点を当てるのは岡山県の倉敷市である。それにもかかわらず、ここに福岡で開かれた国際大会の事例を紹介するのには理由がある。

上に述べたように、世界政治学会福岡大会は、大規模な国際学会を円滑に運営しきただけでなく、参加者の多くが会場となった都市・地域の魅力を満喫できたという点で、きわめて質の高いものであった。それは、周到かつ龐大な準備作業を経て大会運営に臨んだ日本政治学会の努力と、それを支えた地元の自治体や財界の支援の成果だといえる。筆者も、当時日本政治学会理事会の一員として縁の下で多少の貢献をすることができたので、海外からの参加者から寄せられた「驚嘆すべきコンベンション」という評価は決して外交辞令ではなかったと信ずることができる。それだけに、そうした賛辞に必ずといって良いほど付される彼らの感想から、強い印象を受けることになったのである。その感想とは、「日本の西のはずれに、このような近代的な大都市があるとは全く知らなかった、しかも、そこには実に魅力的な個性や地域文化、それに伝統が息づいている、すばらしい」というものである。

このような実感のこもった感想自体は必ずしも意外ではなかった。海外に住んだり旅をしたりすれば、日本に関するニュースがほとんどなく、東京や京都を別とすれば、日本のまちや地域の名前がほとんど知られていないことはすぐにわかる。それでも、来てみるまで福岡がどんなところなのかほとんど分からなかったという感想は、やはりある程度は落胆の気持ちを私のなかに引き起こした。日本政治学会は、リーフレットやホームページなどを通じて、世界政治学会の会員に、大会プログラムだけでなく開催地の情報も事前

にきめ細かく伝えていた。コンベンションシティーを追求してきた福岡市、それに福岡県も、英文のホームページを充実させて自己紹介にこれつとめていた。学会側だけでなく、地元自治体の首長も、メイン・レセプションでは英語で歓迎の言葉を述べるほど、国際的な感覚を有していた。しかも、大会参加者たちの多くは現代政治の研究者である。当然主要国、それもこれから自分たちが行こうとしている国の事情についてはある程度通じていてもいいはずである。それなのに、日本側から事前に発信される情報は、必ずしも彼らの現実感覚に触れることができなかったのである。

福岡に限らず、大阪や広島でさえ、海外ではその名が知られているとは言い難い。否、京都ですら、近年世界的な日本食ブームなどを通じてその魅力が伝わるようになるまでは、京都議定書という地球環境保全のシンボルのいわば部分要素としてのみかろうじて認識されていたにすぎないというべきかも知れない。

いずれにせよ、東京と京都以外の地域や都市については、第2次大戦中に米軍による空襲等の対象として数多くの言及がなされたことを別とすれば、海外のメディアや出版物が広範な読者、視聴者を対象として繰り返し紹介することはあまりなかったといってよいだろう。否、占領軍の司令部が置かれ、サンフランシスコ講和条約で日本の独立が認められたあと、東アジア情勢や日本経済の驚異的な発展などの事情で首都東京の名前が世界に流通していったのを例外とすれば、上述のように、京都でさえ戦後しばらくはその名が海外メディアに登場することはほとんどなかった。そのことは、湯川秀樹博士のノーベル賞受賞のニュースを見るとよくわかる。この件はさすがに世界の関心と呼んだが、それを伝えるニュースでは京都という地名や京都大学の名前は無視された。博士が日本人物理学者であることだけはかろうじて言及されてはいたものの、その肩書きについては、コロンビア大学客員教授である点だけが強調され、所属が京都大学であることはほとんど取り上げられなかった。まして、博士が暮らす京都という町については、ほんの少しの注意も払われることがなかったのである。

しかし、それは当時としては無理のない話で、日本独立後は占領軍関係者もすべて引き上げてしまい、時折訪れる骨董趣味の旅行者などを別にすると、京の都に外国人の姿はほとんどなく、千有余年の歴史を誇るこの都にすら、海外では誰もニュースバリューを認めていなかったのである。

実際、今でこそ京都で暮らす外国人の数は4万人を超え⁽¹⁰⁾、海外からの観光客ともなれば年間約100万人に達する⁽¹¹⁾。また、市内の大学、短大に在籍する留学生の数も5千人に迫っている⁽¹²⁾。しかし、高名な日本文学研究者ドナルド・キーンが初めて京都大学に留学した1953年から55年にかけて、この地にわざわざ留学してまで何かを学びに来ている外国人はわずかに十指を数えるほどしかいなかったのである。その「多くはアメリカ人だったが、英国人とベルギー人もいた。(私たちは)一緒に夕食を食べた後、よくタクシーで喫茶店へ乗りつけた。私たちは当時の典型的なタクシーだった小型のルノーに、何とか6人詰め込んだ。ただし、2人はだれかの膝の上に乗らなければならなかった⁽¹³⁾。」要するに、ほんの一握りの日本研究者を除けば、京都の町は世界から忘れ去られていたのである。

それでも、東京はもちろんのこと、京都は日本経済の高度成長が始まると再びその名を海外に浸透させ始める。たとえば、東京オリンピックが開催された1964年、Kyoto という地名を1つでも含む記事の数は、ニューヨーク・タイムズの場合全部で47件だった。もっとも、有名なアメリカ人宣教師が日本人女性と京都で結婚式を挙げたとか、枚方市の菊人形について紹介する記事のなかで同市の位置を京都の近くとしているもの、あるいは新幹線開業を

(10) 2012年12月末日現在。京都市「京都市における外国籍の住民台帳登録者数」『京都市政情報・国際関係資料編』(京都市, 2013年2月), 15頁より。京都市における外国籍住民台帳登録者数は、東日本大震災とそれに伴う福島第1原子力発電所事故に伴って減少したが、それでもその減少幅は2%以下にとどまっている。

(11) 市内宿泊外国人数による推計。京都市観光産業局『京都市観光調査年報』(京都市, 2008年), 4頁。

(12) 京都市総合企画局情報化推進室情報統計室「外国人学生及び留学生の概況:平成20年度学校基本調査集の計結果」『統計解析』(京都市発行)26号, 1頁によると、2008年度における留学生総数は4,688人である。

(13) ドナルド・キーン『私と20世紀のクロニクル』(中央公論新社, 2007年), 146頁。

伝えるなかで「ひかり」の途中停車駅は京都と名古屋だけだという1行を含むにすぎない記事、さらには東京と京都で展示されていたミロのビーナスが無傷で無事パリに戻ったという、「無傷で」という点を強調するかのとき記事に至るまで、京都を単に地名としてのみ扱っているものが47件の大半だった。もっとも、皇帝(天皇のこと)が君臨していたかつての首都であり、今でも日本における文化の中心地である、といった形で多少なりとも京都を内在的に捉えている記事もいくつかは見られるのであるが、そういう記事でも、詳しく報じているものはない。

京都に関する記事は、80年代になると急速に増えていくが、それでも、日本が東京オリンピック開催にわいていたときでさえ、ニューヨーク・タイムズがまだこの古都にほとんど注意を払っていなかったということは紛れもない事実である。まして、京都と東京以外の日本の町については、ほぼ完全に彼らの関心のらち外であったといってよい。そうしたなかで、倉敷は例外的にこの新聞の目にとまっていた。だが、その話を展開する前に、まずもって本稿がニューヨーク・タイムズを重視する理由について、簡単に見ておこう。

1-3 ニューヨーク・タイムズの重要性

いうまでもなく、ニューヨーク・タイムズは、ワシントン・ポストやロサンゼルス・タイムズ、ボストン・グローブなどと並んでアメリカを代表する新聞である。他方で、これも周知のことながら、同紙は、もともとはニューヨークとその周辺をカバーする地方紙にすぎない。そもそもアメリカでは、読売、朝日など日本の5大紙のような全国紙がほとんど存在しない。例外はウォール・ストリート・ジャーナルとUSA Todayである。そのうち、前者は2012年度下期実績で総販売部数238万部と全米トップを誇り、アメリカ国内だけでなく世界中で読まれているが、基本的には経済専門紙である。これに対して、後者はアメリカ全土50州のすべてで販売されている唯一の一般紙であり、その意味で日本の全国紙に比肩するものである。そして同紙は、1982年の創刊以来、カラフルな紙面と手軽さ、それに諸データのわかりやすい図

表化で支持を増やしてきた。アメリカのどこに行っても、中堅以上のホテルなら、毎朝この新聞をサービスとして宿泊客の部屋すべてに届けているところが少なくない。空港の売店やコンビニ（ガソリンスタンドを兼ねているところが多い）にも必ずといっていいほど置いてある。それほど一般に親しまれているのである。

しかし、ウォール・ストリート・ジャーナルが、ビジネスマンや経済の専門家、政治家や政策担当者などの影響力ある人々に広く読まれ、少なくとも経済や財政、金融の分野ではクオリティ・ペーパーとしての評価を確立しているのに対し、USA Today に対する評価はそれほど高いものとはいえない。何よりもページ数が他の主要紙と比べると大幅に少ない。

先に、アメリカの新聞は基本的に地方紙だと書いた。実際、インターネットに押されて近年は廃刊が相次いでいるとはいえ、伝統的には、アメリカでは地方の小さな町ごとに新聞が発行され、地域のニュースをきめ細かくカバーしてきた。そうした地方紙の多くは発行部数も数千から数万と小規模で、一部当たりのページ数も10から20くらいの分量しか持っていない。ここでは、そのような小規模地方紙を仮に純粋地方紙と呼んでおく。そして、ページ数から見るかぎり、USA Today はまるで純粋地方紙そのものである。当然カバーする事件、事項の数は少なく、記事も短く、総じて情報量はかなり限られたものとならざるを得ない。当然ながら、伝えるニュースに対する掘り下げた分析や重厚なコメントもあまり期待できない。

これに対して、ニューヨークやシカゴ、ボストン、サンフランシスコ、あるいはロサンゼルスといった大都市を拠点に発行されている地方紙には、発行部数が数十万部に達するものも少なくない。ニューヨーク・タイムズやボストン・グローブ、ロサンゼルス・タイムズ、あるいはワシントン・ポストなどがそうした大規模地方紙の代表的な事例である。ここではそれらをブロック的地方紙と呼んでおく。実際、ニューヨーク・タイムズはニューヨーク市のみならず、ニュージャージー州などニューヨーク大都市圏全体をカバーしているし、ワシントン・ポストは、ワシントン D.C. のみならず、メ

リーランド州など首都圏全体をカバーしている。それらは単に発行部数が多いだけでなく、一部当たりのページ数が非常に多い（広告をたくさん載せているという事情も関係している）。そして、通常は国際・全国ニュース編、地域ニュース編、ビジネス編、くらし（styles）編、文化・レジャー編、スポーツ編など、主要ジャンルごとに各々日本の日刊紙1部に相当するようなページ数を持つ各編に分かれており、それらがセットになって1部を構成している。1部というより1冊と呼ぶ方が適切である。当然記事の数も主要記事の長さも、日本の新聞と比べると遙かに重厚長大である。そして、各分野に詳しい優秀な記者やコラムニストを多数擁しており、有力な評論家や専門家からの寄稿も多い。USA Today とは情報の質も量も大幅に違うのである。当然、両者に対する評価にも大きな開きがある。ブロック的地方紙のいくつかは高級紙に位置づけられており、その報道や論説は全国的、さらには国際的な注目を集めることも少なくない。

こうしたブロック的地方紙のなかでも、ニューヨーク・タイムズは特別の地位を占めている。確かに、日本では、ワシントン・ポストもアメリカの代表的新聞として取り上げられることが多い。しかし、同紙は首都ワシントンのクォリティ・ペーパーとして議員や政府関係者に影響力を持つてはいるが、首都圏を離れるとその姿を目にすることはほとんどない。これに対して、ニューヨーク・タイムズの場合には、ニューヨーク大都市圏のみならず、アメリカ全土の主要な書店、大学、空港、図書館など、情報の結節点ではほぼどこでもこれを買う、あるいは読むことができるといってよい。しかも、一時経営基盤がぐらついたものの、近年では紙媒体と電子版のセット戦略が功を奏して部数を伸ばし、2012年度下期販売部数ではウィークデー・ベースで約190万部を記録、USA Today を抜いて、ウォール・ストリート・ジャーナルに次ぐ全米第2位につけている⁽¹⁴⁾。しかも、同紙はアメリカを越えて世界

(14) ブルームバーグの記事，“New York Times Tops USA Today to Become No. 2 U.S. Paper,” Bloomberg Online より。

<http://www.bloomberg.com/news/2013-04-30/new-york-times-leads-major-news-papers-with-18-circulation-gain.html>（アクセスは2013年6月13日）

各地で読まれている。さらに、同紙は、世界各国で発行されているインターナショナル・ヘラルド・トリビューン (International Herald Tribune) 紙も経営している。同トリビューン紙は欧州版とアジア版で若干編集が異なるが、基本的にはニューヨーク・タイムズの国際版で、記事やコラムの共通性は非常に高い。この新聞はロンドン、パリ、東京、香港など、世界の大都市で印刷され、店頭売りだけでなく、一部地域では毎日配達されている高級紙である。そのため、各国の知識人や政府関係者に広く読まれている。また、主要都市の新聞売り場や大きな空港、駅などの売店で比較的廉価で販売されており、旅行者や各国の海外居住者にもよく買い求められている。

この、インターナショナル・ヘラルド・トリビューンを合わせて考えると、ニューヨーク・タイムズがアメリカ国内だけでなく、国際的な影響力を持っている理由が一層明らかになる。もちろん、この新聞の影響力が大きいということと、同紙の報道や論説などがどのくらい正確か、あるいは妥当性や説得力を持っているか、ということは別の問題である。実際、同紙はこれまで数々の誤報騒ぎを起こしてきたし、その論説や記事の論調が激しい政治的論争を引き起こしたことも少なくない。というより、引き起こすことが日常茶飯事となっている。だが、激しい論争を引き起こすということ自体、その記事や論説がよく読まれており、大きなインパクトを持っているということを意味している。

日本に関しては、同紙の報道は高飛車にその欠点や後進性、非民主制を責め立てるといふものが多いとの批判がある。筆者もそうした意見にある程度賛成である。実際、データや資料の扱い方に問題がある記事や、アメリカの制度や慣行に合わないものを一律に断罪するという魂胆が透けて見えると感じたことが何度もある。総じて、悪意を持って最初から「日本的」なものをさらし者にしようとしているとしか思えない記事や論説がときどきある、少なくとも一時期はかなり見られた、ということも事実である⁽¹⁵⁾。

(15) ニューヨーク・タイムズにおける根拠が薄弱な、あるいは偏見にもとづいた日本関係の報道については、少し古いだが、次が説得力のある批判を展開している。Charles Burress, *et. als, Japan Made in U.S.A.*, New York, Zipang, 1998.

しかしながら、ニューヨーク・タイムズ、およびインターナショナル・ヘラルド・トリビューンの日本関連記事が常に悪意に満ちた結論ありきの扇情的報道というわけではない。記事の対象となっている日本側の出来事や政治家の発言が批判されるのは当然で、そうしたことを日本のマスメディアが取り上げないこと自体に問題があると納得する場合も少なくない。他方で、対象となっている事件、あるいは社会や文化、経済、技術、要するに日本の諸々の事柄に対して肯定的、あるいは好意的な記事やコメントも決して少なくはない、という点にもきちんと目を向けておく必要がある。また、日本に関するネガティブな記事と肯定的な記事が同時に掲載されていることも別に珍しくはない⁽¹⁶⁾。

ただ、ここで強調しておかなければならないのは、本稿で取り上げる倉敷関連の記事では、ポジティブな論調をとるものが最も多く、次いで事件事故に関する客観報道が来るということである。公害関連の2つの記事を別にするると、倉敷のまちや地域についてネガティブなイメージを喚起するものは1つもない。特に、ニューヨーク・タイムズの旅行(Travel)編で倉敷について報道する記事は、どれもその魅力や活力を強調するものばかりだということを、詳細を論じるに先立って指摘しておきたい。

1-4 ニューヨーク・タイムズの倉敷関連記事概観

今日、ニューヨーク・タイムズの記事は、1885年以降のものがインターネット上で検索可能となっている。そこで、kurashiki というキーワードを含む記事を検索してみると、全部で75件がヒットする。ただ、そのうちの1件

(16) たとえば、2013年2月26日のインターナショナル・ヘラルド・トリビューン紙では、安倍政権の反動性を批判する大きな時評記事のとなりに、同政権の経済政策の積極面を評価する論説記事が掲載されている。前者は、歴史問題に対する安倍政権の対応と外交上の「失策 (gaffe)」を手厳しく批判するもので、フォーリン・アフェアーズ編集委員のジョナサン・テッパーマンが執筆。ページはまたいでいるが、見開き紙面ではその左隣に位置する後者は、ノーベル賞経済学者ポール・クルーグマンによる Japan's model economy? と題するコラムで、安倍政権の経済財政政策を肯定的に論じたものである。*International Herald Tribune*, May 25-26, 2013, pp. 6-7.

は名字が Kurashiki (おそらくは漢字で倉敷) という個人に関する記述が入っている記事である。したがって、Kurashiki という地名、ないしは都市名を含む記事の数は74件となる。以下、本稿では、それらの記事を通じて倉敷がどのように報道されてきたかについて、紹介と分析を行っていくが、その前に、まずは倉敷が所在する岡山県、およびその県庁所在地である岡山市についてみてみよう。

岡山に関する英文記事を見ていく場合には、それが個人の姓をさしている場合がかなりあるだけでなく、全く別の国の別の町を指していることがある点に注意しなければならない。繁体字の漢字で岡山と表記する町は中国にも台湾にもある。そのうち、台湾には、現在は高雄市の一部(行政区)となっている岡山(あえてカタカナで表すとガンシャン)という町が存在する。この地は、日本統治時代の1920年に岡山と命名され、日本の敗戦後にもその地名の漢字表記がそのまま維持されて今日に至っている。しかし、そこには日本軍の飛行場があったため、大戦末期にはたびたび米軍の空襲を受け、その戦果がその都度ニューヨーク・タイムズなどアメリカの新聞で報道された。しかも当時の台湾・岡山は日本本土の岡山と同じく「おかやま」と呼ばれていた⁽¹⁷⁾。

もちろん、日本内地の岡山も激しい空襲を受けていた。しかし、新聞報道に現れた Okayama という地名を見る限りはどちらの Okayama か区別がつかず、また、記事のなかでも特に Okayama in Japan, Okayama in Taiwan 等との区別はなされていなかったために、それだけ Okayama という地名の言及頻度が上がってしまったのである。日本の地名に関する海外での認知に関して、このような事例について今後丹念に掘り起こしていくべきであろう。

日本の Okayama も台湾の Okayama も、第2次大戦が終わるとほとんど瞬時に海外メディアからは忘れ去られていく。国共内戦に敗れた国民党が台

(17) 台湾の Okayama に対する空襲に関しては、さしあたりニューヨーク・タイムズの次の2つの記事を参照のこと。

"Okayama Flames Tower 4 Miles," October 15, 1944.

"B-29's Hit Formosa Again : Blast Heito and Okayama," October 17, 1944.

湾に逃れて中華民国をそこに移したあと、その統治下で高雄市に再設置された岡山区に関しては、残念ながら海外メディアがその後どのような報道をしてきたのかは全くフォローしていない。

日本の岡山に関しては、ニューヨーク・タイムズで見る限り、個人名の「岡山」を別とすれば、それに関する言及は戦後しばらくの間ほとんど途絶えてしまう。その例外が倉敷関連記事である。後で述べるように、倉敷に関する報道にはときどきその所在地として Okayama という県名が付されているのである。その後1990年代以降になると、岡山県内各地が地域そのものとして、あるいは記事に関連する地名として取り上げられるようになり、その都度それらの地域の所在地として Okayama という県名が登場するようになる。たとえば、2002年には、八塔寺、吹屋、越畑という岡山県内の3地区が、同紙の「くらし」(Style)面で、都会的な生活に疲れた心をいやしてくれる日本の古き良き隠れ里として大きく紹介されている⁽¹⁸⁾。そして、これら3地区の所在地として、Okayama Prefecture という県名が記事に付されている。あるいは2012年、東日本大震災における津波被害のアイコン的存在だった大型観光船「はまゆり」をバックに、瓦礫のなかをかがいがいしく走り回る電気自動車・三菱 i-MiEV の感動的な写真をトップに据える記事のなかで、この自動車を被災地に贈った総社市の所在地として岡山の名前が出てくる⁽¹⁹⁾。変わったところでは、香川県・直島の美術館とそれらが展示する作品を紹介するニューヨーク・タイムズのアメリカ全国版 (Arts & Leisure 編) で、直島の位置を示す地図に Osaka, Kyoto とならんで都市名としての Okayama が出てくるという例がある⁽²⁰⁾。また、記事のなかに登場する人物の出身地として岡山県が言及されたり、取り上げられた学術論文の共同執筆者に岡山大学

(18) "Away from Urban Chaos, a Bygone Era : A Rustic Retreat into Ancient Japan," August 23, 2002.

(19) "On First Anniversary of Tsunami : Looking Back Trough a Canny Lens," March 5, 2012. 岡山県は、記事によって単に Okayama と言及される場合もあれば、Okayama Prefecture と表記される場合もある。この記事の場合は前者であり、注18の場合は後者である。ただし、本稿では、いずれの場合も「岡山県」と訳す。

(20) Japanese Island as Unlikely Arts Installation, August 26, 2011.

の研究者がいたりする、というようなケースもある。しかし、都市としての岡山そのもの、あるいはそこにおける地域社会や文化などを取り上げたものはほとんどない。自治体、あるいは地域としての岡山県を取り上げたものとなると、これは皆無である。

第2章 ニューヨーク・タイムズの記事にみる倉敷

2-1 倉敷関連記事の分類

前述のように、倉敷に関連する記事を kurashiki というキーワードで検索すると75件がヒットする。そこには倉敷という名字の個人に関するものが1件含まれている。また、同じ記事が重複して表示されるケースも数件ある。したがって、倉敷の町自体ないしその地名に関連する記事は70件弱ということになる。このほかに、行政的には倉敷市に含まれる水島工業地帯に関連する記事が6件ある。それらの記事には Kurashiki という名前は登場せず、Mizushima という地名が単独で用いられている。また、倉敷市の児島地区も、開通したばかりの瀬戸大橋を紹介する記事の中で、橋の本州側起点をなす地名として1度だけ Kojima という地名で登場する⁽²¹⁾。本稿では、これらも倉敷関連記事に含めながら見ていきたい⁽²²⁾。それらを含めると、倉敷関連記事は合計で75本となる。

これらの記事にはどのような特徴があるのだろうか。先ほど述べたように、倉敷についてネガティブなイメージを喚起するような記事はほとんどない

(21) もっとも、この記事では、橋の四国側の起点である坂出が Sakaido と誤表記されているなど、橋のたもとにある地区に特に関心が払われているわけではない。ただ、瀬戸大橋は倉敷を代表する景観の1つであり、その意味でこの記事が倉敷関連記事の1つに数えたい。なお、ニューヨーク・タイムズに登場するこれ以外の Kojima はすべて個人名である。

(22) ニューヨーク・タイムズに出てくる倉敷市内の地域名は、倉敷(旧倉敷)、水島、児島の3地区だけである。その他の主要地域である玉島については、同紙に出てくる Tamashima はすべて人名であり、地名として Tamashima が出てくるケースは1つもないことを確認してある。倉敷市内のその他の地域も同紙には全く登場しない。

が、報じられている事項は、「古き良き日本の都市」といった広い意味での観光に関するものだけではなく、結構多岐にわたっている。そこで、本節では、まず倉敷関連記事を、(1)経済関係、(2)社会、政治関係、(3)文化、観光、およびまち・地域関係の3つに分け、その上で後者を時系列的に区分しながら分析していきたい。なお、(2)の「社会」には、日本の新聞では主として社会面で扱われるような事件、事故、出来事などを含めることにする。また、ニューヨーク・タイムズの記事において、倉敷という個人名と倉敷という地名が同一記事で扱われている例はないため、個人名の Kurashiki に関連する記事はすべて考慮の対象外とする。

2-2 経済面の倉敷関連記事

ニューヨーク・タイムズに Kurashiki という名前が最初に出てくるのは1933年のことである。その記事は、同年上半期において日本のレーヨン各社が高収益をあげて活況を呈していることを伝えたもので、そうしたレーヨン（日本では人絹と呼ばれていた）製造会社の1つとして、倉敷絹織株式会社（現在のクラレ）の社名が出てくる（記事の中では Kurashiki Rayon Company という英語名になっている⁽²³⁾）。この記事は東京と大阪の証券取引所を通じて見た日本経済のレポートの1つで、当時世界的な大企業を擁する日本の繊維産業が大きな注目を集めていたという背景をもっている。記事は、各社の名前とその利益について触れているだけで、倉敷のまちについては何の言及もない。しかし、同社は当時名実ともに倉敷を本社としており、社名の「倉敷」も、オーナーなど個人の名前ではなく、倉敷という地名からとったものなので、これを倉敷関連記事の第一号として扱うことは許されるであろう⁽²⁴⁾。

Kurashiki が登場する2番目の記事も、日本経済の動向に関するものである。1935年のこの記事は、日本の新聞記事を引用する形で、2年間の好況の

(23) “97% on Japan's Rayon Silk : Heavy Six Months' Profits are Reported by Several Companies,” December 14, 1933.

(24) 倉敷絹織（クラレ）の創業者は、当時の日本を代表する経営者の一人で、大原美術館設立など、倉敷のまちづくりにも大きな足跡を残した大原孫三郎である。

後、日本の証券市場が突然スランプに陥り、株価が大幅に下落していることを伝えている。そして、その中で、倉敷絹織株式会社が登場するのである⁽²⁵⁾。そして、これが戦前のニュー YORK・タイムズに Kurashiki という名前が登場する最後の記事となった。33年と35年のこれらの記事以外には、日本の敗戦とそれに引き続く混乱期の終焉まで、社会経済関係であると地域関連であるとを問わず、倉敷関連の記事は一切見られない⁽²⁶⁾。

さて、第2次大戦後も、Kurashiki の名前はまず経済関連記事の中に登場する。その記事は1952年のもので、日本経済の視察からアメリカに帰国した実業家の報告をもとにしている。それは、日本経済は資本不足に苦しんでおり、不合理な規制などの障害が適切に取り除かれるならば、アメリカにとって絶好の投資機会が生まれるだろうとの観測を行っている。そして、川崎製鉄などと並んで、倉敷レーヨン（旧倉敷絹織株式会社）を日本を代表する有望企業として取り上げているのである⁽²⁷⁾。もちろん、そこでも、Kurashiki はあくまでも企業名であって、倉敷のまちや地域に関する言及がない点は戦前の2つの記事と同様である。ただ、翌年に出た経済記事では倉敷紡績⁽²⁸⁾（Kurashiki Spinning Company）が2行にわたって取り上げられているが、そこでは同社の所在地として Kurashiki の名前が別途挙げられている⁽²⁹⁾。

倉敷紡績は、純粋にアメリカ国内、というよりニューヨーク地域内のニューースにも顔を出している。それは、ニューヨークの金融街南端、バッテリー公園やニューヨーク港を見下ろす位置に当時完成間近となった超高層ビル、

(25) "Overproduction Causes Stock Decline in Japan," June 19, 1935.

(26) 倉敷市の水島工業地帯は大戦末期に大規模な空襲を受けたが、それについても、ニュー YORK・タイムズに関する限り、報道は一切なかった。なお、倉敷のまち（旧倉敷）は幸いにも空襲を免れている。

(27) Bache Again Sites Big Field in Japan : Back from Survey, Stresses Need of Industries There of Foreign Capital," January 2, 1952.

(28) 現在も倉敷紡績株式会社を正式社名としているが、通常はクラボウというカタカナ名を使用している。1888年の発足から長く倉敷に本社を置いていたが、現在は大阪本社と東京本社という体制になっている。

(29) "Japanese Fabrics to be Diversified: With Exports Off 25% in '52, Mills Will Curtail Expansion and Go into Other Lines," April 12, 1953.

No. 2 Broadway に関する記事である。このビルは、ウォール・ストリートを中心とする金融街の一等地に位置するだけでなく、全面ガラス張りに近い斬新なデザインでも注目を集めていた。記事によると、このビルのフロアの多くは証券会社によって「買い占め」状態となっているが、それでも多様な業種の優良企業がその魅力的な立地条件に引かれて多数リース契約を結んでいるとし、そうした優良企業の1つとして、「日本の繊維メーカーである倉敷紡績」の名前を挙げている⁽³⁰⁾。この時代には、倉敷発祥の企業がアメリカでも世界的大企業として認識されていたのである。

これ以後、ニューヨーク・タイムズには、企業に関連する報道の中で9本の記事に Kurashiki の名前が見える。そのうちの7本は倉敷レーヨン⁽³¹⁾に関するものであり、2件が倉敷紡績に関するものである。多くは企業業績やプラント拡張に関する純粋の経済記事に現れるものだが、1963年の3記事は日中関係が絡んでいる点が多少異質である。すなわち、この年倉敷レーヨンは同社が開発したビニロンという当時の最先端繊維製造技術とその工場設備を、まだ国交が開かれていなかった中国に売却することを決定、日本政府からいったんは拒絶されるものの、最終的にはその輸出許可も取り付けた。それが、日本の対中国政策の変化を意味するものとしてアメリカでも関心を集めたのである⁽³²⁾。

倉敷レーヨンと倉敷紡績はその後も3回顔を出す。1972年の倉敷紡績関連記事を最後に、両社の名前はニューヨーク・タイムズから姿を消す。そして、次に広義の経済関連で Kurashiki の名前が登場するのは思いもよらない出来事にもとづくことになる。だが、その前に、今は倉敷市の一部である水

(30) "Brokers 'Corner' No. 2 Broadway : Financial Houses are Most Numerous Tenants of New office Building," September 12, 1959.

(31) 倉敷レーヨンは1970年にクラレに社名を変更しているが、その変更以後今日に至るまで、同社はニューヨーク・タイムズに登場していない。

(32) "Japan to Review Trade with China," August 11, 1963, "Red China Buying Japan Textile Unit Capacity in 20-Million," August 20, 1963, "Japan Mill Sale has Wider Impact : Japan Eager to Reassure Allies on Red China Deal," August 22, 1963.

島工業地帯関連の記事について簡単に触れておきたい。

倉敷の水島を指す Mizushima という名前がニューヨーク・タイムズに登場するのは、1967年の記事からである。最初の3件は、いずれも水島工業地帯の製鉄所に関連するものである。その最初のもは、日本の高度成長を支えてきた鉄鋼製品の輸出に陰りが見えるようになったという経済情勢を伝える記事で、その中に川崎製鉄（当時、現在は JFE スチール）水島製鉄所に関する短い記述がみられる⁽³³⁾。2番目の記事は、同製鉄所の大きな航空写真を冒頭に据えた長い経済記事で、新設の第2号高炉が粗鋼生産（重量ベース）で世界新記録を打ち立てたことを中心に、日本の鉄鋼産業における果敢な経営方針とたゆまない技術革新について詳しく論じている。もっともそこには、極東における日本の位置を示す地図と、水島を中心とした西日本の拡大図が掲載されているが、瀬戸内海（Inland Sea）と水島（Mizushima）を始めとして、大阪（Osaka）や徳島（Tokushima）、広島（Hiroshima）などの名前は出てきても、倉敷（Kurashiki）も岡山（Okayama）も登場しないのだが⁽³⁴⁾。いずれにせよ、60年代に入ると、ニューヨーク・タイムズの倉敷関連経済記事には、繊維から鉄鋼へという、産業構造における重心の変化がはっきりと映し出されている。

水島関連で3番目となる1972年掲載の記事も、川崎製鉄水島製鉄所に関するものである。ただ、この記事が伝えているのは中国の動向で、記事は次のように始まっている。「日本による外交的承認を狙うとともに、中国は日本の産業技術を獲得するために多大な努力を開始した。」そして、この年の6月以来、中国が各産業別にその分野の専門家からなる経済ミッションを日本に派遣している事実を伝え、製鉄に関しては日本鋼管と川崎製鉄の高炉、さらにストリップミルによる高速圧延技術に大きな関心を払っていること、特に川崎製鉄水島製鉄所で実用化されているコンピューター制御のオートメーショ

(33) “Tokyo Steel Export Outlook Dim,” May 13, 1967.

(34) “Furnaces Set World Record : Japanese Steel Makers Think Big,” November 15, 1969.

ン方式を視察するために、代表団が同地を訪問したことなどが報じられている⁽³⁵⁾。

2-3 社会、政治面の倉敷関連記事

これまでみてきたように、水島地域を含む倉敷の企業に関するニュースは、戦前から高度成長期にかけてニューヨーク・タイムズに何度も登場する。しかし、上記1972年の中国がらみの記事を最後に、倉敷に関連して個別企業に触れている記事は同紙から全く姿を消してしまう。そして、次に同紙が倉敷地域の経済関連ニュースを伝えたとき、そのテーマは暗転という言葉がもっともふさわしい、経済活動の負の側面を伝えるものとなっていた。それは、1974年に起きた三菱石油水島精油所からの大規模な重油流出事故を伝えるニュースであり、今日では環境問題に分類される事項となるであろう。

いうまでもなく、この事故は日本において連日トップニュースとなった。そして、日本だけでなく、世界がこれに注目したのである。ニューヨーク・タイムズもこれを大きく伝えた。この事故に関する記事は2つあり、クリスマスの日に出た最初の記事では、瀬戸内海を中心とする西日本の地図を付し、東京発の特約外電という形で第1報としてはかなり詳しい状況説明を行っている⁽³⁶⁾。これに続く翌日の記事でも、同紙は外電で事故の続報を詳しく報じ、事故を起こした三菱石油が原因について口をつぐんでいるなか、重油漏れをおこした貯蔵タンクのある精油所は埋め立て地であるために地盤が弱く、そのためにタンクが傾いてその構造にゆがみが生じて側壁に亀裂を生んだのではないかという倉敷市消防局など当局側の見方を伝えている。そして、流出した重油の量や漁業被害の予測などにも触れたあと、海上を漂う重油が紀伊水道を経て太平洋にまで広がる危険性について論じている。もっとも、この記事では、前日の記事に付された地図上で Kii Channel と正しく表記さ

(35) "China is Looking to Japan for Industrial Know-How : Relays of Specialists Explore Tokyo's Technology to Implement Peking's Fourth 5-Year Economic Plan," November 13, 1972.

(36) "Japan Fighting her Biggest Oil Spill," December 25, 1974.

れていた紀伊水道が³⁷、Kit Channel と、i を t と間違えて表記されているなど、正確性に欠けるところも一部にはみられる。しかしそれでも、全体としては最初の報道よりさらに踏み込んだ内容となっている⁽³⁷⁾。

なお、最初の記事では、重油流出事故だけでなく、水島地区の公害にもある程度スペースが割かれている点が注目される。この記事では、水島工業地帯は Mizushima Industrial Complex と表記され、18の大工場と10の石油精製プラントからなっていること、かねてより大気汚染が深刻で、田畑の作物にも被害が出ていることが指摘されている。そして、公害に対する住民からの抗議を受けて、この地域を管轄する倉敷市当局は工業地帯の拡張を取りやめる決定を前年に下した、と締めくくられている。

倉敷地域における事件や事故に関する報道はこの2件だけで、水島の公害問題に関するさらなる続報もなかった。この頃になると、ニューヨーク・タイムズに登場する倉敷関連の記事は文化・観光、あるいは地域の魅力を伝えるものだけとなっていく。ただ、かなり時が下った2001年、思いもよらない出来事のために、倉敷は一時的に国際的な注目を浴びることになる。それは、広い意味では政治の領域に関する出来事であった。

この年の4月、ニューヨーク・タイムズは、「日本政府のビザ交付方針が中国の怒りを買っている」という記事の中に、Kurashiki という名前を登場させている⁽³⁸⁾。中国の「怒り」なるものは、訪問場所はあらかじめ指定された都市に限ること、および滞在中は政治的発言をしないこと、という条件付きながら、日本政府が台湾の李登輝前総統⁽³⁹⁾(在任は1990年から2000年の11年間)に対して、入国を認めたことに対して向けられていた。李前総統はかなり重篤な心臓疾患を患っており、日本の病院で最高水準の医療を受けることを目的に掲げてビザの申請をしていたのである。退任後も台湾でカリスマ的な人気を誇っていた李氏は、日本語を流ちょうに操ることで知られてい

(37) "Oil Leak Spreads over Sea in Japan, Harming Fisheries," December 26, 1974.

(38) "Japan Risks China's Anger with Visa Plan," April 20, 2001.

(39) 在任期間は1990年から2000年の11年間。

た。しかし、同氏は総統在任中、台湾が独立国家として自主路線を歩むべきであると主張、台湾の独立を認めない中国政府から激しい非難を浴びていたのである。条件付きとはいえ、1年ほど前まで台湾政治最高の地位から独立を主張していた人物に日本政府がビザを出すということは、中国からすれば自らの「一つの中国論」を否定する敵対行為だということだった。

このような国際的な対立が倉敷に関係するというのは、李氏が入院、治療を希望する病院が倉敷にある倉敷中央病院だったためである。李氏は、台湾が日本の統治下にあった時代に台湾で生まれて日本語での教育経験が長く、大学も京都大学を卒業した。そして、倉敷中央病院は単に心臓、血管疾患の治療で日本有数の水準を誇っているだけでなく、李氏の母校・京都大学の医学部と密接な関係を持っていた。しかも、京都や東京のように政治的喧噪の地からも離れていた。李氏にとって、日本入国という高度に政治的な目的を実現しつつ、日本政府に対する政治的負荷を極力減じ、しかもそれ自体は非政治的な目的たる心臓治療に専念できるという、願ってもない滞在地だった。それでもやはり中国政府は表向き強硬な批判を行い、日本では（もちろん台湾でも）李氏をめぐるニュースが連日マスメディアを賑わし、世界からも注目を集めることになったのである。

ここで紹介しているニューヨーク・タイムズの記事は東京発となっており、同紙の東京特派員が書いたものと思われる（記者名は記されていない）。そして、李氏が入院する病院については単に「倉敷の病院」(a hospital in Kurashiki)とだけ伝えている⁽⁴⁰⁾。そのことは、当時、倉敷という地名が特に説明するの必要性を感じないほどニューヨーク・タイムズにとってはなじみの場所になっていたことを示している⁽⁴¹⁾。実際、この頃になると、倉敷の地名

(40) これまで述べてきたように、李登輝が入院した病院が倉敷中央病院であることは、当時の日本の新聞やテレビが伝えていただけでなく、筆者自身が同病院で確認している。

(41) もちろん、ニューヨーク・タイムズの記者や編集者にとって倉敷がなじみの地名になっていたということは、一般読者にとっても説明の必要がないほどなじみになっていたことを意味するわけではない。したがって、この件の続報では、倉敷について、「東京の340マイル西」という注を付している。“A Taiwan Traveler Everyone is Watching,” April 24, 2001. なお、この続報記事は東京ではなく台北発である。それでも、倉敷につ

が日本国内でかなり有名になっていただけでなく、倉敷を紹介する記事がニューヨーク・タイムズですでにある程度蓄積されていたということがその背景にはあったのである。その間の事情については、次節以降で詳しく紹介していきたい。

2-4 文化、観光、地域社会面の倉敷関連記事：戦後の15年間

第2次大戦後、文化や観光面で倉敷がニューヨーク・タイムズによって取り上げられた最初の事例は、1955年にロイター電にもとづいて書かれた小さな記事である⁽⁴²⁾。記事は、倉敷在住の天文家、本田実氏による新しい彗星発見を伝えている。倉敷の地名は出てこないが、氏が活動の拠点とし、次々と彗星を発見していった天文台の名前、倉敷天文台 (Kurashiki Observatory) が登場する。もっとも、この記事では、倉敷天文台は天津 (Otsu) の近く、とされている。つまり、記者には、倉敷というまちにある天文台だという認識は全くなく、その Kurashiki は、このときまでの経済記事に出てきた Kurashiki 同様、企業や団体の固有名詞の一部として表記されているのである。

だが、それにしてもなぜ倉敷天文台が天津のそばにあるなどという混乱が生じたのであろう。その謎は日本の新聞を見ると解決することができる。本田氏がこのとき新彗星を発見したというニュースは、日本では毎日新聞や読売新聞には出てこないが、朝日新聞が小さな囲み記事で報道している⁽⁴³⁾。岡山発のこの記事によると、7月29日午前3時45分⁽⁴⁴⁾倉敷市住吉町（現在は中央2丁目）の倉敷天文台で本田実技師がオリオン星座とエリダヌス星座の境界付近で「新スイ星 (ママ)」とみられる星を発見した。同技師は、直ちにこの発見を東京天文台と京都の嵯山天文台に知らせ、確認を依頼した。そして、嵯山天文台から本田氏の発見が新しい彗星であることを翌30日に確認したこ

いてはごく簡単な説明だけで事足りると思われていたわけである。

(42) "New Comet Reported," August 1, 1955.

(43) 『朝日新聞』1955年7月31日夕刊。

(44) 日本時間。ニューヨーク・タイムズの記事ではアメリカ東部時間帯が用いられている。

とが発表される。ニューヨーク・タイムズのくだんの記事は、京都市と大津市との境にあるこの天文台の場所を倉敷天文台の位置と誤解したのである。

このように、新彗星発見を伝えるニューヨーク・タイムズの記事には不正確な情報が含まれているとはいえ、それは文化都市としての倉敷にかかわる最初の記事である。そもそも、倉敷天文台は、旧倉敷町長・原澄治の私財によって1926年に日本で初めて設置された民間天文台で、当時国内最大級の反射望遠鏡を備えた立派な施設であった。市民にも広く開放される一方、12の新彗星を発見して世界天文学会から金メダルを贈られるなど、多くの業績を残した本田のような民間観測者もここに拠点を置いて活動した。それにもかかわらずその事績が顕彰されることはほとんどなく、都市化の進展とともに夜空が明るくなって星の観測も困難になって、本田が死去したあとは訪れる人もあまりなく、近年まで廃屋に近い状態になっていた⁽⁴⁵⁾。まして、倉敷の市民も市当局も、倉敷天文台が新彗星を発見したと伝える記事に反応した形跡は全くない。倉敷は奥深い伝統、景観行政などのまちづくり、それらを通じて育まれてきた美しい町並みなど、文化や地域社会という面で豊かな資産を数多く有する都市である。しかし、あとでみるように、日本の外からのまなざしにはこれまでほとんど無頓着であった。本田実と倉敷天文台に関する海外メディアの記事が瀬戸内のこの古いまちから何の反応も引き出さなかったということは、ニューヨーク・タイムズによるその後の文化観光都市・倉敷に関する報道の影響を占うものであった。

しかし、後に数多く行われる観光・文化都市倉敷に関する掘り下げた報道に移る前に、文化関連の小さな記事をあと2つ紹介しておきたい。最初のものは、考古学上の発見に関するものである⁽⁴⁶⁾。この記事は、岡山 (Okayama) の古墳で1,800年前から1,900年前にかけてのものと思われる中国製の銅鏡(複数形)が見つかったことを伝えている。そして、それらの銅鏡に関して、

(45) 倉敷天文台に関する記述は主として次に依拠した。「倉敷天文台入館者増える」『山陽新聞』2012年8月8日。

(46) "1,800 Years Old Mirrors Found," March 24, 1957.

倉敷考古館主事⁽⁴⁷⁾である鎌木義昌氏は、「1つは後漢期末のもので、そのほかのものはこれよりもさらに1世紀をさかのぼる」との談話をのせている。

その次に来る文化面の記事は1958年に書かれたもので、国立西洋美術館と有名な松方コレクションがその基本テーマである⁽⁴⁸⁾。しかし、その記事は、倉敷に関連する事柄についても10行を割いているので、ここで紹介しておきたい。この年、フランスの建築家ル・コルビジエの基本設計になる西洋美術館本館が完成したのを記念して、フランス政府は自らが所有する松方コレクションの絵画や彫刻を多数日本政府に返還することにした。同コレクションは造船王・松方幸次郎が兩大戦間に収集した歴大な美術品からなり、そのかなりの部分はロンドンで保管されていた。これは、大恐慌後売却などにより若干は散逸したものの、一部が第2次大戦の戦火を逃れるためにパリ等に疎開したために、相当な量の美術品がまとまった形で残っていた。それを、サンフランシスコ講和条約で海外資産を放棄した日本政府に代わってフランス政府が取得、さらにその後種々の交渉を経て大部分がこの年日本に返還されるべく船で東京に送られたのである。

記事の大半は、美術品が東京に送られることになったそのいきさつを説明しながら、松方コレクションの意義とその主要な絵画、彫刻に関する解説を加える形になっている。その上で、松方コレクションほどではないが、戦前の日本には松方幸次郎以外にも世界的な価値を有する西洋美術コレクションを作り上げた大資本家、すなわち石橋正二郎と大原孫三郎がいたことを指摘、それぞれのコレクションと所蔵状況に関する紹介を行っている。そのうち大原については、彼が億万長者の繊維王で、1919年からヨーロッパに日本の画

(47) ニューヨーク・タイムズの記事では director と訳されている。鎌木氏の氏名については、その漢字表記について倉敷考古館に確認済みである。なお、倉敷考古館は1950年に設立され、吉備地域の考古学的調査や出土品の研究、展示などにおいて大きな足跡を残してきた。現在は財団法人として運営されている。また、白壁と貼り瓦の壁が美しいその建物は、大原美術館本館と並ぶ倉敷美観地区のシンボリック的存在として多くの写真や絵に登場し、観光客を引きつけている。そして、その建物の写真は、後に取り上げるニュー YORK・タイムズの記事でも、倉敷の代表的風景として登場する。

(48) “French Art for Tokyo,” May 11, 1958.

家を送って手に入る最良のモダンアートを購入させ、それを日本に送らせたこと、そうして集めた収集品は、ゴーギャン、ゴッホ、ローランサン、デュフィ、ロダンなどのすぐれた作品を含んでいるとしている。また、大原が日本中央部の岡山県にある小さな町・倉敷にそうした作品を展示するための美術館を建て、以来それらの芸術作品は（松方コレクションと違って）全く散逸することなく、今日まで保全されていると伝えている。

2-5 文化、観光、地域社会面の倉敷関連記事：1960年代と70年代

1966年のニューヨーク・タイムズ日曜版・旅行編に、それまでの倉敷関連のものとは質量ともに異なる、画期的な記事が登場した。「古き良き日本からの時のこだま」と題するこの記事⁽⁴⁹⁾は、記者・パトリシア・ブルックス (Patricia Brooks) による記名記事であり、広告を除くと1頁の紙面全体を使い、さらに後続のページにもその続きや倉敷の地図を載せているという点で、それまでの倉敷関連記事とは全く違ったものとなっている。また、大きな写真が3つ付されていることも目を引く。写真の第一は倉敷考古館正面のもの、第二は民芸館内部の展示室、第三は大原美術館東洋・工芸館に展示されている棟方志功の作品「真珠採りの海女」(Pearl Divers) である。写真にはそれぞれ簡単な説明が付されている。

この記事は、次の一文で始まっている。「東京・京都・大阪・神戸というおきまりのルートからほんの少し足をのばせば、私たちにはほとんど未知のままであるものの、しかしそこを訪れるならこの上ない喜びを味わえること請け合いという町、倉敷がある。この小さな町は、旧き良き日本の面影を探し求めている人々によって発見されるのを待っている。倉敷は、古い時代における日本の町のすがた、そして今では急速に失われつつある当時の暮らしぶりについて、訪問者たちに鮮明なイメージを伝えてくれる。倉敷は京都から広島に行くルートで途中下車するのに便利だし、神戸からなら100マイル

(49) "Echoes of Old Japan," April 17, 1966.

(160キロ)と離れていない。』

このあとブルックス記者は倉敷の歴史に触れ、倉蔵の連なりがこの町に独自の色彩と個性を与えているとして、その魅力の深奥に分け入っていく。漆喰の白壁 (whitewashed clay walls)、建物の上に斜めに乗っている瓦屋根、建物の下半分を截然と縁取っている青みがかった黒タイルなど、倉敷の穀物倉庫を特徴付ける意匠が記者に強い印象を与える。彼女はこの町の歴史についてかなり学習したようで、倉敷についてはその旧さに目を奪われがちだが、同時に、この町が江戸時代の繁栄から一旦衰退したあと、再び産業都市として栄えていることを見逃してはならないとして、次のように述べる。

「倉蔵の簡素な美しさ、柳の連なるまどろむがごとき川筋、町の人々のゆったりとした暮らし、これらはどれをとっても近代的で喧噪に満ちた産業社会の単調さとは相容れない。しかしながら、産業は倉敷の主な見所に直接的な貢献をなしてきたのである。その見所とは、美術館複合体 (museum complex) である。町並みが醸し出す魅力からすると、旅行者は1つの美術館に出会うだけでも思いもかけないプレゼントだと思うだろう。しかし、予想外の驚きは後から後からやってくる。というのも、倉敷は5つもの美術館を持っており、しかも、そのいずれもが高いレベルに達しているからである。」

そして、紡績会社で財をなした大原孫三郎が美術館を創設したこと、彼が児島虎次郎をヨーロッパにやって西洋の美術を勉強させるとともに作品の収集に努めたことを詳述する。さらに彼女は、孫三郎の息子が父の意志を継いで美術館の充実に努めるとともに、隣接の倉を改装して洗練の度を極めた日本の民芸品⁽⁵⁰⁾を多数収蔵するに至ること、モダンティと簡素さの驚嘆すべき両立を成し遂げた近代美術館の建物には古代エジプトやギリシャの彫刻などが展示されていること、といった、この美術館の歴史とその全体像を描いたあと、その前の倉敷川を渡って倉敷考古館に読者を案内する。

この記事のメインテーマは倉敷の伝統と文化であるが、それらは観光と渾

(50) ローマ字表記の日本語・*mingei* を使ったあと、folk arts of Japan との説明を付している。

然一体となっている。この記事が旅行欄に収められていることから、それは当然の前提である。そこでブルックスは、次に1948年に地元有志が設立した民芸館を訪れて質の高い民芸品の数々を堪能、そのそばにある喫茶店「民藝 (*mingei*)」でお茶を飲み、古い神社やお寺がたたずむ鶴形山公園を散策し、さらに地元の住民を主なお客とするアーケード街⁽⁵¹⁾で骨董品などを冷やかす、この地の焼き物の美しさに見とれている。美しい手工芸品としてい草で編んだござやもの入れも彼女の目にとまっている。

ブルックスはしかし、倉敷に旧き良き時代をみているだけではない。彼女は、この町が古い時代のなかに生きていてだけでなく、まさに現代の都市としても機能していることを忘れてはならないとしている。彼女は倉敷の現代性を示す代表的な事例として、丹下健三の設計になるモダニズム建築、当時新築された倉敷市役所⁽⁵²⁾をあげている。もっとも、彼女の関心をより強く引いたのは市役所近くの倉敷国際ホテルで、これについては New Hotel として小項目を立ててかなり詳しく報じている。すなわち、このホテルは大原美術館や倉敷川から指呼の距離に位置して印象的なたたずまいを見せていること、このホテルも大原家の創設になること⁽⁵³⁾、伝統的な倉の風情をその個性的なスタイルに融合させる一方、ル・コルビジエ風のモダニズムも少しばかり取り入れていること、ロビーには棟方志功の大きくてドラマチックな版画が飾られていること、などである。もちろん、ホテルとして頂を起こしたからには、宿泊者向きの情報も欠かせない。彼女は、各部屋には手織りのテーブルクロス、上質の磁器など、心引かれるものがさりげなく置かれていること、食事とサービスは世界的に見ても最高水準であること、総じて、このホテルが日本的な美と欧米的な快適性とを兼ね備えていると高い評価を与えている。

記事は、倉敷の魅力を、古い町並み、不意に現れて人々を魅了する小路、

(51) ブルックスがみたアーケードは現在は撤去されている。

(52) 倉敷市の市役所は後に別の場所に新築され、この記事が出た当時の市役所建物は、現在は市立美術館として利用されている。

(53) 倉敷国際ホテルは、大原孫三郎の息子・総一郎が創設し、1963年に開業した。

たゆとう川面，そして心和む田舎の雰囲気の4つに集約する。そして，日本の知識人たちはもう何年も前にこの町を発見しているが，欧米人も，この町の秘密を彼らと分かち合いたいと思うようになるだろう，という一文で締めくくっている。

本節では，ブルックスの記事を詳しく紹介した。繰り返すが，それはこの記事が画期的な意味を持っていたからである。時は1966年である。東京オリンピックから1年半，6大都市以外には，箱根や日光，そして信州の一部がかるうじて日本在住の外国人の注意を引いていたに過ぎない時代のことである。ましてこの記事はニューヨーク大都市圏の読者を主たるターゲットとする旅行編で取り上げられたものである。この記事と，そこに添えられた3枚の写真が，倉敷のみならず，日本全体への関心を深めるものとなったことは想像に難くない。

ブルックスによるこの記事の7年後，倉敷はもう一度町として単独で取り上げられる。リチャード・ハローランによるその記名記事はかなり大きなもので，1頁のおよそ3分の1を占めている⁽⁵⁴⁾。写真は出ていないが，代わりに日本全図と関西から中四国にかけての拡大地図とが載っている。そこに出ている都市は，東京，大阪，岡山，そして倉敷の4つのみである⁽⁵⁵⁾。

この記事のトーンは，その見出しの，「忙しい現代日本の町で伝統が保持されている」という表現によく示されている。すなわち，日本経済の高度成長は工業化，人口の都市集中，あるいはモーターリゼーションなどをもたらし，そのために日本の旧き良き伝統は急速に失われているが，そうしたなかであって，倉敷は経済の繁栄と伝統的なくらしや町並みの両立に成功した数少ない町だ，というものである。

ハローランも，倉敷の歴史や白壁の町並み，美術館，そしてクラフトワークや築130年の倉を改装した日本式旅館などを紹介している。しかし，彼は倉

(54) "Tradition is Preserved in a Busy Japanese Town," February 23, 1975.

(55) そこにおける Okayama は岡山市で，岡山県ではない。無論，地図には県境も示されていない。

敷の現代都市としての一面についてブルックスよりも相対的に大きなスペースを割く。ブルックス同様、この記事は現代性の象徴としてまず丹下健三設計の市役所を取りあげる。ついで、近くの水島工業地帯を観察し、そこでは川崎製鉄や旭硝子など、多くの大企業が最先端の設備を持つ工場でフル操業していること、そのために地域経済は活況を呈し、解雇や自宅待機といった話しはあまり聞かないこと、韓国や台湾などとの競争に晒されて厳しい状況にあるはずの繊維産業もここでは好調を保っていること、ただ、三菱自動車だけは輸出が伸び悩んで在庫が積み増していることなど、経済面の情報がかなり詳しく伝えられる。さらに、中学生から大学生まで「男子学生用の黒い制服」を何十万着も生産している企業にも、取材の足をのぼしている。

1978年になると、小さな記事ながら、倉敷の名前は文化関連で再び登場する。それは名古屋発の AP 電で、フィラデルフィア交響楽団が11年ぶりに日本を訪問することになった旨を伝える23行の記事である⁽⁵⁶⁾。それによると、交響楽団は106人の演奏家と25人の随員からなる大規模なもので、5月15日にチャーター機で福岡に到着、日本の4都市で講演予定である。4つの都市とは、福岡、神戸、名古屋、倉敷である。そして、倉敷については、特に「美術館の町」(museum city)と、唯一形容句を付して紹介している。アメリカの一般読者の間でも、この頃になると倉敷の名前がその美術館などとともにある程度知られるようになっていたことの証左だといえるだろう。

2-6 文化、観光、地域社会面の倉敷関連記事：1980年代と90年代

1985年、倉敷のまちはニューヨーク・タイムズの日曜版で再び、そして今度は2頁にわたって報じられる⁽⁵⁷⁾。記事を書いたのは、当時の東京特派員・

⁽⁵⁶⁾ “Enthusiastic Japanese Welcome Philadelphians,” May 22, 1978.

⁽⁵⁷⁾ “The Quiet Heart of Kurashiki : An Industrial City a few Hours from Tokyo Preserves a few Blocks of an Older, Calmer Japan,” June 23, 1985. ただ、アメリカの新聞の常として広告スペースが大きく、最初のページ（9頁）でも下3分の1ほどは旅行会社とレンタカー会社の宣伝に充てられている。とはいえ、記事はさらに31頁に続いていき、そこには倉敷の地図も掲載されている。

スーザン・チラ (Susan Chira) である。少々留意すべきは、この年までに、新幹線が博多まで開通してから既に11年が経過していることである。東京からの空の便は当時はまだ限られたものであったが、新幹線を使えば東京と岡山の行き来は、ブルックスがニューヨーク・タイムズで初めてこの町を取り上げたときと比べれば格段に便利なものとなっていた。岡山から倉敷に行くためには岡山で在来線に乗り換えなければならないが、倉敷までの所要時間も今日と同様の20分弱で、列車の本数も多く、さしたる不便はない。

この記事でまず目を引くのは、2つの大きな写真である。1つは、紙面最上段に掲げられた、皿や壺など4点の陶器の写真で、紙面の左端から右端まで、細長ながらめいっばいに広がっている。これらは倉敷民藝館に展示されているもので、新聞の説明では、「作者不詳の日用食器」と紹介されているが、写真の質が良いため作品の魅力と高い芸術性がよく伝わってくる。もう1つは、倉敷河畔で写生中の小学生を前景に、川にかかる美しい文様の石橋を中景に、そして、白壁のどっしりとした民家 (大原邸) を背景に配した紙面中央の大きな写真である。写真には、石組みの護岸が川面に映える様子もくっきりと映っている。

これら2つの写真を添えた記事を、チラは次のように書き出している。「日本に初めてやってくる人々は、古さびた木の家、優雅な庭園、そして洗練されたおいしい食べ物というロマンチックなイメージをいただいているものだが、東京に着いてその没個性的なコンクリートのビル群、騒々しいパチンコ店、夜ごとけばけばしく輝くネオンサインを一目見るなり、まず間違いなく、いただいていた夢が打ち砕かれるのを感じないわけにはいかない。その点、倉敷は、首都から4時間半しか離れていない近さにあるのに、同時にまた、数百年も離れた遠くにある。この町は過ぎ去りし日の日本の面影を垣間見させてくれる。倉敷は、外国人旅行者たちの、そして多くの日本人たちの、幻滅した心を癒してくれるのだ。」

倉敷に旧き日の面影を見るチラは、しかし、その美しさを守るために市民や市当局が多岐の努力を積み重ねてきたという事実も見逃してはいない。そ

うした努力のおかげで、低層で連なる白壁の家並みや曲線を描いて続く細い裏通りは300年間その姿を保ち続けることができたのである。メイン・ストリートに分かつ運河（倉敷川のこと）に沿って歩けば、しだれ揺れる柳が水面に映る姿を眺めて時を過ごすことができる。午後の日差しのなか、ひとたび狭い路地に入れば、日本情緒にあふれた風景に次々と出会う。薄い木製の鎧戸（おそらく格子戸のこと）、いらかの波、白壁の家を縁取る陶製の四角い黒タイル……。もっとも、彼女は次のようにちくりとこの風景の汚点に触れるのも忘れない。「電柱とかその他いろいろある近代性の象徴を視野の外に置くのは至難の業である。」今日の読者のためにここで急いで付け加えるなら、電柱や電話線など美観を損ねていた「近代性の象徴」は、まさに市民や市当局の努力によって、現在ではほとんどが地表からは撤去されている。

チラもまた、ブルックスやハローランに倣って倉敷の歴史を語っている。そして、旧倉敷中心部の美しさの多くが大原一族の貢献に負っていることを指摘、その事業と功績に触れる。次いでエル・グレコの「受胎告知」の名をあげて大原美術館を紹介、市立近代美術館（前の倉敷市役所建物を転用）、倉敷考古館へと筆を進めていく。

この記事は、日曜日にニューヨーク・タイムズの旅行編を読んで週末に旅への誘いを楽しむ人々に向けて書かれている。チラは、もちろん観光面での情報を伝えることにも意を用いており、週末夫とともに東京から倉敷に来た自身の体験を記している。彼らは新幹線で金曜の夜に東京を発ち、岡山で在来線に乗り換えると20分で倉敷に着いたこと、保存地区（注：美観地区のこと）までは倉敷駅からタクシーで5分だったこと、宿は倉敷国際ホテルにとったが、部屋のベッドは平均的な外国人にも幅、長さともに十分であったことなど、アメリカ人が知りたいと思う基本的な情報を具体的な形で記している。翌日の土曜日、夫妻は倉敷散策に出かける。

町並みや美術館の展示に関するチラの紹介はこれまでの2つの記事と大差ない。しかし、やはり旅行ガイドとしてはより徹底している。たとえば、大原美術館では、展示されている工芸品の多くが複製品として販売されている

ことを伝えたあと、そのどれもが高い質を持っているが、他方でそれなりの値段がするものばかりだと注意を促す。また、大原美術館からさほど遠くない場所にある玩具館に触れて、「これは大原家の寄贈によるものではない博物館」だとその成り立ちを語ったうえで、それが倉敷のメインストリートに軒を並べるお土産屋のなかでも一番良い店の内部に位置していると解説。それでも、入場料は1ドル以下と安く、展示されている手作りの玩具はあらゆる国から集められており、万華鏡の内部さながら、めくるめく空間を訪れる人に見せてくれる……。

昼食は老舗の「旅館倉敷」で。正面からではなく、横から入ると、日本庭園のなかを石畳の小道がガラスのドアで仕切られたテラスに導いてくれる。そこでは着物姿の女性 (kimono-clad hostess) がきめ細やかに泡立てた緑茶 (抹茶のこと) でもてなしてくれる。そこには甘い伝統的なお茶菓子が添えられており、お茶のほのかな苦みを和らげてくれる。お茶がすむとようやく旅館の一室に案内される。そこでは小分けにされたいろいろな食べ物が次々と出てくるのを待つ間、庭を見て楽しむこともできる。最初に来たのは陶器の皿に盛った前菜、次は焼き魚のタケノコとゴボウ添え。ここでゴボウとはどんな野菜かを説明し、盛りつけと器について描写する。それから、ゆずというレモンのような薬味を散らした米のプディング (たぶん雑炊のこと)、天ぷら、もう一品焼き魚、お吸い物 (some clear soup)、そしてデザート of 果物。木製の桶 (おひつ) からはご飯がおかわり自由。お茶も大きな木製のポットに入っている。代金は税込みで1人27ドル (当時のレートで約6千円)。夜は40ドルのディナーもある。

旅館倉敷の隣には珈琲館 (Coffee-Kan) という名の木窓が似合うコーヒー店があり、そこから旅館の庭の一部を眺めることもできる。このマスターは伝統的に日本人が茶道に注いだのと同じく研ぎ澄まされた情熱を傾けてコーヒーを学んだ。正確にしてしなやかにコーヒーを挽き、カップに注ぐ。コーヒーの大ファンであるチラの夫は、彼が入れたコーヒーについて、人生で味わった最高の一杯に匹敵すると評したという。

コーヒーを飲んで元気が出たあとは民芸品の買い物。倉敷は洗練された磁器や絹織物で名高いが、もっと質朴で実用的な民芸品も魅力的だ。日本では民芸品が高く評価されており、倉敷はこの地域の今も元気な民芸品の中心地である。売られているのはまず陶器、なかでも、上薬を使わないで焼き上げた茶色の製品（備前焼のこと）がいい。テーブル掛けや敷物といった織物、い草のバスケット、版画、木または磁器のお面、手吹きガラス製品、玩具館で売っている日本のすてきなおもちゃ類。

店の人はどこでもほとんど英語を話せないし、売っているものもたいへいはそれなりに値が張るが、木製品や紙製品には安いものもある。彼らはえびす通り商店街と倉敷本通り商店街にいくつかよい店を見つけた。また、倉敷アイビースクエアにもいい店がある。アイビースクエアはボストンのクインジー・マーケット（Quincy Market）のようなも⁽⁵⁸⁾ので、古い紡績工場を中心に造られている。それは、倉敷の産業史に関する興味深い展示場でもある。

チラは倉敷の市民についても述べている。日本の農村部の多くがそうであるように、倉敷でも人々は心温かくフレンドリーである。夜は小さな焼鳥屋に入ったのだが、そこにいた若いカップルと言葉を交わすうち、彼らは自分たちの酒瓶をすっかりチラ夫妻のカップに傾けてくれたのであった。飲んだあとは、ほろ酔い機嫌で人々が実際に暮らしている通りを気の向くままに歩き回ったのであるが、そんな風に歩くのが倉敷探訪の一番よい方法である。表通りも間違いなく魅力的だが、ちょっとばかり観光客が多すぎ、時とする絵はがきのように完璧でありすぎる。あちこちの小路や狭い裏通りでは、石造りの白壁屋敷⁽⁵⁹⁾が木でできた家々と解け合い、民芸店の隣には薬屋、そのまた隣には酒屋、さらにその向こうには畳屋、という具合に連なっていて、表通りよりもずっと楽しいし、どこへ行っても美しい。散策するなら特に町の奥にある丘（鶴形山公園のこと）に登るのがお勧め。チラ夫妻が鳥居をく

(58) 実際には、クインジー・マーケットの建物そのものというより、この古い建物とその前の広場というボストン中心部人気の組み合わせのことであろう。

(59) 記者は、終始漆喰の壁を石造りと誤解している。

ぐって丘に登ると、倉敷の町並みが広く見渡せた。近くには古くからの真っ白な壁と黒い瓦屋根の倉敷の古い町並み、そしてその縁をコンクリートのビルやアパートが取り巻く。しかし、コンクリートの建物の輪のなかには、昔の面影が今に息づいている。現代の日本はその外側で立ち止まっているのだ、少なくとも丘の上から視線を動かすしばらくの間は。記事はこのあと、東京から倉敷への交通手段と料金、民宿を含めた倉敷での宿泊情報と電話番号、大原美術館の売店で売られている各種レプリカの値段、美術館の開館時間、閉館日といった観光情報をかなり詳しく伝えて終わっている。

チラの記事は、観光案内を兼ねた紀行文となっている。当時、海外から日本にやってくる観光客は次第に増加しており、さらには仕事などでこの国に長期滞在する外国人の数も、急速な経済成長と歩調を合わせて増えていた。そして、彼らの行動半径も、東京から東海道線沿線へと伸びていった。それでも、大都市とその周辺を一步外に出ると、そこは多くの外国人にとって未知の領域のままだった。しかも、京都を例外として、そうした大都市は空襲で一旦灰燼に帰し、その後は景観にも伝統の再建にもほとんど注意を払わないまま無機質な拡大を続けていた。この記事は、太平洋ベルト地帯では求めがたい日本の魅力を、倉敷を通してニューヨークの読者に伝えるものだった。

然り、ニューヨークの読者がこの記事のターゲットである。日本の読者ではない。まして倉敷の市民ではないのだ。そこにこのまちに注がれる外からのまなざしがある。チラは、おそらく1966年のブルックスによる倉敷紹介記事を踏まえて、この町に古き良き日本の面影をたっぷり読み取っている。そして、美観地区や大原美術館、あるいはアイビスクエアという日本では定番となっていた倉敷観光のポイントを、アメリカの読者に届く実感のこもった文章で紹介している。しかし同時に、そのような「絵はがきの完璧さ」に物足りなさを感じるとも報告していて、観光のメインルートから外れて人々の生活が織り込まれた風情へと読者の関心を誘っている。さらに、日本については、物価が高く、英語が通じず、社会が閉鎖的だというイメージが外国人、特に欧米人のあいだでは長く定着している⁽⁶⁰⁾が、チラは、前二者は倉

敷にも当てはまることを率直に指摘している。また、東京からわずか4時間半の距離だが、町の規模からして2、3泊程度がいいところだとの指摘も、時間の限られた外国人旅行者向けのコメントであろう。まして、旧倉敷の周辺地域、ハローランが1975年に訪れた児島や、高度成長期に経済面で注目を集めた水島、あるいは倉敷市外の吉備路や瀬戸内海沿岸などは、紙幅の関係もあってかまったく言及されていない。観光という点では、倉敷は何日も滞在するような町ではないのだ。

この記事のあとも、倉敷はお勧めの旅行先としてときどき登場するようになる。たとえば、翌1987年のニューヨーク・タイムズ日曜版の旅行編は、JR⁽⁶¹⁾が外国人向けに販売している割引切符「ジャパンレールパス」を使った日本旅行特集を組んでいるが、そのなかに、広島から瀬戸大橋経由で四国に行く途中、倉敷と岡山に立ち寄るといったコースが紹介されている。もっとも、この記事はいかにレールパスを有効に使って魅力ある場所をたくさん回るか、記者自身が考えたルートを実体験してその結果を報告するものとなっているので、そこに出てくる各都市の解説は基本的には他のもっと詳しい旅行ガイドに任せる、という体裁になっている。倉敷についても、町に関する解説は特にない。翌1988年の記事（これは日曜版ではない）では、瀬戸大橋の開通に合わせて四国特集が組まれているが、橋の両方のためと、児島と坂出で瀬戸大橋博覧会が開かれていることも紹介されている。とはいえ、これにも、まちそのものに関する紹介は特にない。

また、1997年の日曜版では、国内外の旅行に関する読者からの質問に記者が答えるという形式の記事が、そのなかで倉敷について触れている。読者からの質問は、4月か5月に日本に行ってお寺と庭園を見たいが何かいい案はないか、というものである。これに対して記者は、エスプリという旅行社が発売している13泊、3,100ドルのプランを勧める。このプランは、アメリカ人

(60) この状況は今も変わっていないという指摘については、次を参照。レジアス・アルノー「シャンゼリゼ通りで阿波踊りを」『毎日新聞』2013年3月11日。アルノーはフランスの新聞・フィガロ紙の東京特派員として、15年もこの国に滞在している。

(61) 国鉄は、この年の4月に民営化されてJR各社になった。

の日本旅行専門家がツアー・コンダクターとして同行し、主に京都を見て回る。しかし、ほかにも鎌倉、高山、そして倉敷の3カ所を訪れることになっている。そのなかで倉敷は、17世紀から続く蔵屋敷の町並みと、西洋美術、および日本の民俗工芸 (folk arts)⁽⁶²⁾で有名な町だと紹介されている。翌1998年の記事でもやはりエスプリ社の日本旅行パッケージが紹介されると同時に、そこでは、シカゴ美術館とヴァージニア州ノーフォークのクライスラー美術館が共同主催する日本美術旅行が、美術と建築だけでなく工芸 (crafts)にも力点を置いている点で、この分野に興味のある人にはお勧めだとしている。そして、倉敷については、古い米倉を改装した建物に入っている民芸博物館 (Folk Craft Museum, 倉敷民藝館のこと) を特にその魅力にあげている。

2-7 文化、観光、地域社会面の倉敷関連記事：2000年以降

21世紀に入ると、倉敷はもう一度日曜版で大きく取り上げられる⁽⁶³⁾。記者の名前はエリザベス・アンドー (Elizabeth Andoh)。おそらくは日系アメリカ人であろうが、記事のなかで自分は日本語がまだ片言しかできないこと、そして、50年代後半にニューヨーク市の音楽美術高校に通ってそこで陶芸を学んだこともあることを明らかにしているのも、その視点はニューヨーカーのものだといってよいだろう。記事には、美観地区の家並みを写した大きな写真、およびボタン柄をあしらった麻布など民藝館展示物の写真が添えられ、倉敷の地図も載っている。

「倉敷の歴史的な建物群の黒い瓦屋根 (tiled roofs)、真っ白に塗り固められた壁、そして格子窓は驚くほど印象的である。だが、歴史を学ぶことでこ

(62) 大正期以来その芸術性が高く評価されてきた日本の日用工芸品については、その歴史と伝統を特に強調する場合には、柳宗悦の造語である民芸をそのままローマ字で *mingei* または *mingei* と表記したうえで、folk arts と英語で注釈をつけることが多い。ここではそうした背景にまで踏み込んでおらず、*mingei* というローマ字も用いられてはいない。要するに、倉敷は民俗工芸一般というレベルで既に世界的な評価を得ているのである。

(63) "A Company Town Thrives on Art," January 20, 2002.

の町に対する興味はさらに高められる。」アンドーはこのように書き始める。そして、美観地区 (Bikan Chiku) として知られるその中心部の歴史を江戸時代にまでさかのぼって述べていく。その過程で、倉敷川という美観地区を流れる川が実は瀬戸内海と結ぶ運河であり、かつては穀物その他の荷物を満載した運搬船が行き来していたこと、そうした商品の集散地として運河沿いには倉庫 (kura) や豪邸 (yashiki) が建ち並び、おそらくそれが倉敷という町の名前の由来となったこと、倉敷は今日では芸術と文化の中心地として知られており、人口も43万人と大きな都市であるが、その中心にあるのは美術品と工芸品に特化したこの小さな町・旧倉敷の歴史的保存地区であることなどが、つぎつぎと描かれていく。

その上で、アンドーは20世紀初頭におけるこのまちの工業化に目を転じる。その頃、倉敷は大きな利益を生み出す紡績業の中心地だった。その中心にいたのが大原一族で、彼らは織機の音が絶えることのないこの工場都市を動かしていった。大原家はこの地に多くの学校や病院を作っただけでなく、今日倉敷を芸術の重要な中心たらしめている美術館や博物館のほとんどすべてを創設したと述べる。そして、そこから美術館の描写へと筆を進める。

彼女は、大原美術館が西欧美術の傑作を収蔵した日本で最初の美術館であることを指摘、まずその概要を述べる。そのうち、粋なモダニズム建築の別館には多種多様なコレクションがあるが、そのなかには日本人画家が描いた西洋画の他に、ウォーホールやリクテンスタインといったアメリカのポップ・アートの作品が飾られていることを強調している。また、イサム・ノグチやヘンリー・ムーアなど、20世紀を代表する著名な彫刻家の作品が屋外の芝生に展示されていることも指摘される。こうした言及は、いうまでもなくアメリカの読者、特にニューヨーク・タイムズの日曜版を読んで週末の時間を過ごすようなニューヨーカーたちを意識したものである。

さて、そこからアンドーは、大原孫三郎の事績を繙いていく。そして、大原が1920年代のパリで西洋絵画を学んでいた児島虎次郎に大金を託し、100を越えるヨーロッパの絵画を購入させたこと、そのなかには、エル・グレコ、

ルノワール、マネ、マチス、ロダン、ゴーギャンなどの名作が含まれ、そうした絵画や彫刻は大原美術館の本館に展示されていること、本館の建物は、コリント式の列柱を備えたギリシャ風の建物であることなどが紹介される。

アンドーはまた、大原一族と民芸運動の関わりについても触れ、そこから日本における日用工芸品の芸術性についてかなりのスペースを割いている。すなわち、孫三郎とその息子・總一郎は、西洋美術だけでなく、20世紀初頭の日本に芽生えた民芸 (mingei, or folk art) 運動の支援にも熱心に取り組んだ。民芸という日本語は美学者・柳宗悦の造語で、熟達の、しかし無名の職人たちによって創り出された実用品には美が宿っているということを表す言葉だ。アンドーは、簡素に創られた日用品のなかに芸術性を見ろという柳の発想が日本の美術界を震撼させるものであったと述べている。

それは、倉敷での取材に先立って、アンドーがこの町の歴史や芸術、文化について深く学んでいたことを物語るものである。彼女は、日本の民俗工芸運動初期の立役者たちがいずれも彼ら自身高名な職人を兼ねていたという事実は、日用生活品の無名性というその理念とは矛盾する面を持っていると指摘しつつも、柳宗悦グループの中心的メンバーとして、河合寛次郎、芹沢銈介、富本憲一、濱田庄司、それに「くだんのイギリス人 (the Englishman)」バーナード・リーチという著名な民芸作家の名前をローマ字表記で次々と、しかも正確にあげていく。ベンガラの型染め (kata-zome stencil dyeing) で有名な芹沢銈介が1956年に人間国宝に指名されたこと、さらには木版画で名高い棟方志功も柳を囲むグループの活動的なメンバーだったことも見逃さない。そして、これら6人の作品は大原美術館の工芸館 (Kogeikan) に展示されていること、工芸館は美術館別館の産業芸術部門棟で、1960年代初期に立てられたことを付け加えている。

アンドーはまた、大原美術館から少し離れた倉敷民藝館 (Kurashiki Museum of Folkcraft, Kurashiki Mingeikan) の情報も読者に伝えている。すなわち、この美術館は1948年に地元工芸家のグループの支援で創設された。建物は古い米倉を改装したものであること、本当に無名のガラス職人、織物

職人、染織家、竹やい草の細工師、金属加工職人、陶芸家の作品が展示されていることなど、大原美術館工芸館との違いが具体的に示されている⁽⁶⁴⁾。そして、2つの美術館を見て回りながらニューヨークで通った高校の陶芸の授業を振り返り、粘土をひねる手触りや難しいろくろを回して壺や皿が形を見せるときの満足感を思い出している。彼女には陶芸の実体験と知識があるのだ。実際、窯の予測しがたい炎がもたらす失望と喜びの交錯が記事のなかで語られている。

倉敷民藝館を見て回るうち、アンドーは和食 (Japanese food) をつくる過程が、料理とその器の取り合わせ (matching) を考える喜びにつながることに思い至る。そこから、調理場の職人、料理の民芸というアイデアが出てくる。無名の料理人が細やかな気配りと熟練の技をもって作る日常の料理というものは、まさに味の民芸というべきものである。倉敷で彼女が味わったいくつかの料理は、この地が生み出した食の民芸作品なのだ。そして、民藝茶屋・新粋という、地元の人々のあいだで人気のパブで出された2品に民芸の神髄を見る。

それはどのようなものか。ひとつは骨せんべい (hone sembei, 直訳すると bone crackers だとしている)、もうひとつはあら炊き (ara-daki, 直訳すると煮込んだぶつ切りの魚) である。彼女は、ニューヨークの読者のために、それぞれの料理がどのようなものか、細かく説明する。骨せんべいは、他の料理で使うために身を削いだ魚の残り、すなわち頭と背びれ尾ひれを一体性を保ったまま二度揚げしたもので、ポテトチップスのようにぱりぱりとした塩味の食感で癖になりそうだが、ポテトチップスよりも栄養的にずっとすぐれている。あら炊きはというと、それはマグロのような大型の外洋魚の普段は捨ててしまうような部分、すなわち身のついた頭の骨やカマの部分をストックと甘い醤油で時間をかけて煮込み、照りが出るまでたき詰めたものである。そこには、魚料理にあまりなじみがないニューヨークの読者に、視覚と

⁽⁶⁴⁾ 倉敷民藝館は大原美術館とは独立の財団法人であるが、その創設に際しては、やはり大原総一郎が支援を行っている。

味覚の両面から倉敷の飾らない魅力を伝えようというアンドーの思いが込められている。彼女の目から見ると、観光地として身だしなみを整えた倉敷だけでなく、日常生活レベルの倉敷にも至る所に民芸の精神が息づいているのだ。

こうして、アンドーは観光スポットをはずれた倉敷の街中に入っていく。バブを出て歩くのは本通り。倉敷川沿いからほんの一筋入ったこの通りは、中心街 (Main Street) を意味するその名前とは裏腹に歩道もない狭い道で、両側の建物はどれも小さく、せいぜい2階建て。しかし17世紀の雰囲気は今に伝えている、と、彼女は好意的に描き出す。自転車やバイク、あるいは車がときたまこの狭い通りを両側をこするように通っていくものの、さして気になるほどのことはない。そこには旗を掲げたガイドに先導されて土産物屋へと突進する観光客の大集団もやっては来ない。だから訪問者たちはゆっくりと散策を楽しむことができるのだ。ここでは、あちらこちらにこの地における民芸の伝統を見て取ることができる。地元の手芸品を商う小さな店もたくさん散らばっている。

アンドーは、ここを実際に、あるいは想像のなかで訪れるニューヨーカーのために、おすすめのお店をいくつか紹介する。たとえば風の館 (Kazeno Yakata, 直訳は Hall of Breezes)。ここは紙細工を扱う店で、風で動く立体的なオブジェや風車などが魅力的だ。一陽窯 (Ichiyou-gama) という岡山県の6大窯の1つもこの通りのそばにギャラリーを兼ねた店を出していて、その2階は疲れた足を休めるのうってつけの喫茶店になっている。このギャラリーの近くにあるのがユニークな木製玩具の店、伊勢屋 (Iseya) だ。その登り人形 (climbing dolls) はひもを引っ張ると弾み車とクランクの仕掛けで人形がポールを上っていく。アンドーのお気に入り、木彫りの馬がリズムカルに駆けていくおもちゃだ。この店は、安い木工玩具も多数扱っている。

それから彼女は玩具館 (Nippon Kyoudo Gangukan, Rural Toy Museum) を訪れ、そこで展示されている人形や古いゲーム、凧といった玩具が、日常生活レベルの文物に内在する魅力を余すところなく伝えていると述べる。そして、美観地区の外縁にある貯金箱博物館 (Chokin-bako Hakubutsukan, the

Savings Box Museum) に足をのばし、その通俗性にもつながるキッシュなコレクションを記事に加える。そこには、2,000個もの豚の貯金箱がある。そこから、彼女は日本の大衆文化の一面にも考察を広げていく。豚の貯金箱は家で小銭を貯めるという形で儉約を推奨するためのものだが、その形は日本人が大好きな不二家のペコちゃん人形やマンガのドラえもん、キュービーや相撲人形などに通底するものをもっているというのである。彼女は、この博物館にはポパイ人形貯金箱やフrintストーン一家貯金箱など、アメリカのものも展示されていることを付け加え、アメリカの読者にアピールしている。

倉敷におけるキッシュな魅力の極めつけが貯金箱博物館のとなりにある骨董屋である。そこはノミの市のようなところで、ありとあらゆる掘り出し物を売っている。そのなかにはレコードに耳を傾けているあのビクターの犬も、陶製のものがいろんなサイズで取りそろえられており、屋根の上にはその犬がずらりと並んで驚くような光景を見せている。おそらく子どもたちが抱きまわったのであろう、すり切れた着物姿の日本人形もあれば、プラスチックのおまけグッズもある。後者についてアンドーは、oh-mah-kay と発音するのだと注釈しつつ omake というローマ字を用い、日本風にデフォルメされたクラッカー・ジャック景品をイメージすればよいと彼女の読者に解説している。

記事を締めくくるにあたって、アンドーは、美術館や博物館めぐり、ウィンドー・ショッピング、狭い通りや路地の探訪で明け暮れた倉敷の2日間でもリフレッシュすることができたので、東京の大都会暮らしに戻っても大丈夫だと総括している。そして、最後にビジター・インフォメーションのコーナーを設け、倉敷へのアクセスやホテル、旅館、記事で触れた店や美術館の住所、電話番号、それに若干の付加的な情報を載せている。電話はニューヨークの読者がアメリカから直接かけられるよう、日本の国番号(81)付きである。

21世紀に入ってから、倉敷についてまとまった情報を提供しているのはアンドーのこの記事だけである。そのあとは、2006年、同紙の旅行欄(日曜版ではない)に日本旅行の総合案内が出たとき、そのなかで「倉敷は絵はがきのような歴史的保存地区で有名で、是非訪れるべき所」だと簡単に紹介され

ている。しかし、今のところ、それ以外に倉敷、ないし水島など倉敷市の一部をなす地域の名前をこの新聞に見つけることはできない。

おわりに

本稿では、ニューヨーク・タイムズが取り上げた倉敷関連の記事について詳しく見てきた。倉敷は、日本の地方都市のなかでは早くからこの新聞の注意を引いてきた。その名は早くも戦前に登場している。ただ、1960年代の中庸まで、同紙の記事における Kurashiki という単語は、倉敷を本拠とする企業や機関の固有名詞の一部をなしているに過ぎず、まちそのものに関する情報が伝えられたわけではなかった。というより、倉敷を含む岡山地域全体がこの新聞の意識に上ることはほとんどなかった。たまたま Okayama という地名が出てくると、それは岡山の町に赴いたアメリカ人宣教師の結婚に関する情報だったり、日本統治下でおかやまと呼ばれた台湾にあった岡山の話し、それもアメリカ軍による空襲の話しだったりした。

ただ、岡山、そして倉敷の名前が世に知られるチャンスがかつて学術の世界では開きかけたことがあった。戦後初期のことである。日本がまだ連合軍の占領下にあった1950年、岡山市内にミシガン大学日本研究センターの現地研究所が開設され、人類学や政治学など各分野の日本研究者、大学院生、およびその家族がそこに滞在した。研究者たちは、当時の日本についてその平均的な像を得るにはどこで実地研究をするのがよいか十分に検討したあと、岡山の地を選んだのである。そして、都窪郡加茂村新池（現在の岡山市北区新池地区）をはじめとして、岡山県と香川県の数カ所で集中的かつ長期にわたるフィールド・リサーチを行った。そして、そのうち主として新池地区での研究をもとに、浩瀚な学術書を出版した⁽⁶⁵⁾。これは、その後のアメリカにおける各分野での日本研究を先導するものであった。この本では、当時の岡

(65) Richard K. Beardsley, John W. Hall, and Robert E. Ward, *Village Japan*, Chicago, The University of Chicago Press, 1959.

山市についてかなり詳しい紹介がなされている。倉敷についても、その簡単な歴史が記されているほか、商業や流通面で新池と結びつきが強い町の1つとしてたびたびその名が出てくる。また、中選挙区制下における選挙政治の分析においても倉敷が登場する。当時の加茂村は、倉敷と同じ岡山第2区に属していたからである。したがって、ミシガン大学による岡山での調査が続いていたなら、海外における岡山や倉敷の情報は実際より遙かに豊富なものとなっていたであろう。しかし、残念ながら同大学の岡山現地ステーションは50年代半ばに閉鎖されてしまい、それとともにこの地域に寄せられる海外のまなざしも消えてしまった。

その点で、1966年のブルックスによる倉敷紹介記事は画期的なものであった。もちろん、この記事の力点は、倉敷に旧き良き時代の日本を見るという、懐古的なものである。倉敷はまた、東京のような大都市の喧噪を離れた、静かで魅力的な農村空間を代表するものであった。それが、当時倉敷に対して外から与えられたアイデンティティであったのだ。しかし、同時にそれは、白壁となまこ壁が美しい家並みの写真とともに、一般読者に倉敷の魅力を詳しく伝えるものであった。しかも、そこにはすぐれた西洋美術館もある。それは、パールハーバーに奇襲攻撃をかけ、つい20年ほど前までアメリカと死闘を繰り広げた日本に、欧米とも中国とも違う、全く独自の伝統美が存在していることを鮮やかに印象づけるものであった。

倉敷の町が一旦強い印象を残すと、この町の名を冠した大企業に関する記事との連想も容易になる。そこから、倉敷の経済的側面への関心が生まれる。ハローランによる記事は、静的な伝統美と繊維業や水島工業地帯という都市の活力との共存を描き出すものであった。そして、日本経済の高度成長を象徴する工業地帯として、水島地域が単独で紙面を飾るようになった。しかし、オイルショック以後、日本経済の「奇跡」が少なからず色あせたこともあり、倉敷とその構成地域に対する経済面での注目は、その後急速に失われてしまった。

そのあと、町としての倉敷に関する報道は、基本的にはブルックスのライ

ンに戻っていったとあってよい。美しい町並み、伝統、美術館、大都市と対照的なという意味での農村部的な (rural) 静けさなどである。しかし、記者たちのまなごしが倉敷に「絵はがきの美しさ」を超えたものを見いだすようになっていったことも確かである。その第一は、まち、あるいは地域の歴史に対する関心である。それは単に江戸期から続く古いという意味での歴史性だけではない。紡績業などの産業史や民芸運動などの文化史、そして美観地区から一歩奥に入った狭い通りで展開される市民生活という今、要するに、さまざまな時間が積み重なったこの町の物語である⁽⁶⁶⁾。

第二は、倉敷の芸術性に関する注目である。「美術館のまち」倉敷というイメージが定着する一方、その民芸についても関心が高まっている。チラによる記事がそのトップを民藝館所蔵の陶器で飾っていたことは既に指摘した。アンドーの記事になると、民芸に関する叙述は、その運動史も含めて重層的になっていき、かつ、その日常生活性という原点を現代の食生活のなかにも求めるという形で広がりも見せる。そして、ポップ・アートの拠点であるニューヨーク出身者らしく、日常生活の地平を介してペコちゃん人形など日本独特の大衆造形にまで考察をめぐらしていく。多様な表現空間としての倉敷が捉えられているとあってよいだろう。

こうして、ニューヨーク・タイムズによる倉敷の紹介は、魅力的な観光地としてだけでなく、高尚なものから猥雑に近いものまでを含めた、多様性を含んだユニークなまちの物語へと膨らみを見せていったのである。ただ、それでも、都会的な (urban) 喧噪と対照的な倉敷の農村的 (rural) 静けさというブルックスの関心は、その後の記者たちにも通底している。アンドーの記事が、倉敷で十分にフレッシュしたので東京の都市空間に戻って行くことができるという一文で締めくくられていたことを想起すればよい。だが、農村的な魅力という点を強調するなら、倉敷は中途半端な地域である。旧倉敷

(66) 都市にさまざまな時間の重層的な重なり合いを見るという視点については、次を参照。鷺田清一『京都の平熱：哲学者の都市案内』（講談社、2007年、講談社学術文庫版、2013年）、48頁。

に限ったとしても、それは小都市であって、田舎ではない。純然たる田舎の魅力を求めるなら、他に候補地は無数にあり得る。実際、アンドーが記事を書いた同じ2002年に、同じく岡山県にある高原の小さな村・八塔寺を大きく取り上げる記事がニューヨーク・タイムズの紙面を飾っていた⁽⁶⁷⁾。近年では、青森県中部の村が展開しているユニークな村おこしがニューヨーク・タイムズ国際版の「世界のニュース (World News)」面を飾っていた⁽⁶⁸⁾。

もちろん、東京や京都といった大都市に関する記事は非常に多く、地方の都市についても、金沢や高山など、かつて倉敷が独占していた「旧き良き時代」の面影を残しつつもそれぞれに魅力的な町が次々と取り上げられている。倉敷に対するこの新聞の関心が相対的に低下しても不思議ではない。まして、大都市をはじめ、多くの町や地域が海外からの観光客を増やすために英語や中国語などによる発信を強化している。倉敷も確かに多言語によるホームページやパンフレットの充実には乗り出してはいる。しかし、ニューヨーク・タイムズのような重要メディアが自発的に報じてきたイメージや情報について自覚的だったとは到底いえない。

観光客を増やす方策について論じることは本稿の目的ではない。しかし、そうした方策を考えることは、外からのまなごしをいかに捉えるかという、地域や都市のアイデンティティに関わる要素になり得る。アイデンティティとは、それをいなく主体の内部だけで自己完結的に生み出されるのではなく、他者との関係性のなかで紡ぎ出されるものである。もとより外から投げかけられる言説やまなごしをそのまま受け入れる必要はないし、実際にもそのようなことは通常はあり得ない。むしろ、自己に対して他者が持つ規定性に向き合い、肯定であれ否定であれ、あるいはデフォルメであれ、対話を続けることのなかからアイデンティティは生成発展していくものである。ニュー

(67) “Away from Urban Chaos : A Rustic Retreat into Ancient Japan,” August 23, 2002.

(68) “A New Sort of Sustenance from Rice : In Bid to Attract Tourists, Village Turns Paddies into living Pieces of Art,” *International Herald Tribune*, July 26, 2010.

ヨーク・タイムズの記事を紹介することによって、倉敷が、そしてどこであれ地域一般が、自他との対話による物語を豊に作り上げていく1つのきっかけになれば幸いである。

<完>